

『武田信玄』

～白雲流れ行く彼方に～

脚本・演出 美咲 蘭

監修 小松 芳郎

「武田信玄」～白雲流れ行く彼方に～

景	場面
プロローグ	京の都 羅城門跡の辺り
第一景	甲斐の国 躑躅が崎館
第二景	甲斐の国 上野城(椿城)界隈の戦場にて
第三景	父と子 そして元服
第四景	三条夫人輿入れ
第五景	晴信初陣 南佐久郡海ノ口城攻め
第六景	父・信虎追放
第七景	新しき国主と諏訪攻略
第八景	山本勘助の仕官と、諏訪姫
第九景	甲州法度
第十景	塩尻峠(柿弦峠)の合戦
第十一景	決戦川中島
第十二景	義信謀反

第十三景 椿散る 三条夫人旅立ち

第十四景 信玄死す

第十五景 武田氏滅亡への道 長篠の合戦

エピローグ 冬の落日 勝頼最期

機構	照明	音響	映像	人物	台詞・ト書き	凡例: ↓ ↑ …吊りもの上下 装置→…出す 装置←…片付け
	オーケストラに			M	「 ^{しなの} 信濃の ^{くに} 国」入り、	
					やがて ^{のどか} 長閑な ^{きょう} 京の ^{みやこ} 都が ^{せんらん} 戦乱の ^よ 世となる ^{ようす} 様子を ^{あらわ} 表してB・G	
				群衆	(^{かんきゃくせき} 観客席を ^{とお} 通り、やがてステージへと	
緞帳↑					階段へ ^さ 差し掛かった ^{ところ} に ^{どんちようあ} 緞帳 ^あ 上がってゆく)	
				プロローグ	京の都 今宮神社の辺り	
			今宮神社映像	出演	^{あしかがよしまさ} 足利義政・ ^{ひの} 日野 ^{とみこ} 富子・ ^{みやこ} 都の人々・ ^{ひとびと} 土一揆 ^{つちいっき} の人々・ ^{ひとびと} ゆき	
				群衆	(^{にぐるま} 荷車が、 ^{かご} 籠が、 ^{ひとびと} 人々が ^{きょう} 京の ^{みやこ} 都を ^{おうらい} 往来して…)	
	下手高台		足利義政	足利義政	^{とき} 時は、 ^{いま} 今を ^さ 去る ^{ねんまえ} 553年前、 ^{むろまち} 室町 ^{じだい} 時代の中頃。 ^{なか} ここ ^{ごろ} 京の ^{きょう} 都 ^{みやこ} では、	
					^{あしかが} わたし、 ^{よしまさ} 足利義政が ^{むろまちばくふ} 室町幕府 ^{だいはちだいしやうぐん} 第八代 ^{しやうぐん} 將軍 ^あ であつた。	
					^{ききん} だが、 ^{はや} 飢饉と ^{やまい} 流行り病が ^{あいつ} 相次いで ^{ねんぐ} な、 ^{げんめん} 年貢の ^{もと} 減免を ^{もと} 求める	
			土一揆	土一揆	^{のうみん} 農民や ^じ 地侍 ^ら たちは、 ^{つちいっき} 土一揆 ^い と ^{はんらん} 言う ^お 反乱を ^{おこ} し、	
					(^{つちいっき} 土一揆 ^{ひとびと} の人々 ^{むしろ} 蓆 ^{ぼた} 旗、 ^{くわ} 鋏、 ^{たけ} 竹など ^て 手に ^て 手に)	
					^{みやこ} 都はおろか、 ^{きんぎ} 近畿 ^{いつたい} 一帯の ^{くら} 蔵や ^{さかや} 酒屋などの ^{かねか} 金貸しを ^{おそ} 襲つた ^{ゆえ} ゆえ、	
					^て いやはや ^{ありさま} 手のつけられぬ ^い 有様。あ、 ^い 嫌 ^い じゃ、 ^い 嫌 ^い じゃ。	
					^{しやうぐん} 將軍に ^な ど、 ^{なる} なるもの ^{ではない} ではないぞ。(通行は ^{つうこう} 疎ら ^{まば} となる)	
			日野富子	日野富子	^{うえ} その ^は 上に、 ^{あかこ} 初めての ^{あかこ} 赤子を ^う 病で ^う 失つて ^{から} からと ^い 言うもの、	
					^{きお} すっかり ^わ 氣落ちした ^{おとと} 我が ^{よし} 夫、 ^{よし} 義政 ^{どの} 殿は、	
					^{しやうぐん} 將軍 ^{しよく} 職を ^{ゆず} 譲り、 ^{いんきよ} 隠居を ^い したいと ^い 言 ^い いだされて ^な な、 ^{しゆつ} 出家して	
					^{おとと} いた ^{せつとく} 義弟を ^{むり} 説得して ^{しやうち} 無理やり ^{しやうち} 承知 ^{させ} させた ^の の ^じ じゃ。	
					^{ちよくご} ところが、 ^あ その ^あ 直後に ^あ わらわとの ^{あいだ} 間に ^{じつ} 実の ^こ 子が ^う 生まれ ^た た ^{ゆえ} 故、	
					^{こと} ことは、 ^{めんどう} たいそう ^{めんどう} 面倒 ^{にな} って ^き きた。	
			細川山名	細川山名	^{おとと} 義弟は、 ^{ほそかわ} 細川 ^{かつもと} 勝元と、 ^{やまな} わらわは ^{そんぜん} 山名宗全と ^て 手を ^{むす} 結び、	
					^{しやうぐん} 將軍の ^{あとつ} 跡 ^{あらそ} 継ぎ ^は 争 ^い いが ^は 始 ^ま つた ^の の ^じ じゃ。	
			足利義政	足利義政	^{ほそかわ} 細川 ^{かつもと} 勝元 ^{ひき} 率 ^{いる} いる ^{とうぐん} 東軍と、 ^{やまな} 山名 ^{そんぜん} 宗全 ^{ひき} 率 ^{いる} いる ^{せいぐん} 西軍とは、	
炎	CD				^{きょう} 京の ^{まち} 街を ^{ぶたい} 舞台に ^{はげ} 激しい ^{いくさ} 戦を ^く 繰 ^{ひる} り ^{ひろ} 広げ、 ^{ぜんこく} ほぼ ^{しゆ} 全国の ^{だいみょう} 守護大名を	
					^ま 巻き ^こ 込んで ^い いった ^{から} から、 ^{たま} たまつた ^{もの} もの ^{ではない} ではない。	
				群衆	(^{うおうさおう} 右往左往)	

				こうして始まった応仁の乱は、
				十一年もの間 続き、三十万人ともいわれる兵士が戦ったが、
				勝ち負けのつかぬままに、戦は終わり、
	煙			京の都は、荒れ果てた焼け野が原となった。
			父母	(下手からゆきと言う名の幼児を探しながら)
			ゆき	(下手から)おたあさま、おもうさまー。助けてー。
			下人	(5歳ほどの女兒が泣きじゃくる。そこへ盗賊と思しき下人が
				3人ほど現れて、女兒を抱えると上手奥へ連れ去ろうとする。)
			ゆき	いやじゃ、いやじゃーっ。ゆきを一人にしないでたもれー。
			M F・O	(上手高台の義政・富子の二人は平場中央へ)
			日野富子	幕府や将軍への信頼も権威も失われ、
				世の中の立て直しを図る力も、もはや残っておりませぬ。
		動画	群衆	(疎らに通行しているが・・・)
			足利義政	そのような諸国に、やがて守護大名が力をもたげてな
			日野富子	駿河の今川、相模の北条、越後の長尾・後の上杉、
			足利義政	安岐の国は毛利、薩摩の島津、
			日野富子	そして甲斐の猛虎と恐れられた武田。
	稲妻		足利義政	群雄割拠、下剋上がいよいよ激しさを増す
	中平 F・O		富子義政	戦国時代が訪れたのじゃ。
			群衆	(一気に中央へ逃げ惑う)
	雲 E・F	動画 F・O	M	風林火山をイメージしてC・I→B・G
			タイトル	「武田信玄～白雲流れ行く彼方に～」
屏風			第一景	甲斐の国 躑躅が崎館
外観館↓	中平	馬 S・E	躑躅が崎館	出演 たけだしのぶら さい いたがきのぶかた さい おおい ふじん さい じしよ あきさ じしよ みお けらい (武田信虎28歳、板垣信方33歳、大井夫人24歳、侍女浅葱、侍女澤、家来1・2)
			家来1	どの殿一。
	雲 F・O		M F・O	
			武田信虎	武田信虎 何とした。早く申して見い。
			家来1	は、今川勢は只今、

			古府中	いちまんごせん たいぐん 一万五千の大軍で、この、古府中は躑躅が崎館を
				と かこ 取り囲んでおります。わが軍は形勢不利。
			お屋形様	とのお やかたさま 家来2 殿一、御屋形様一。(* 功績ある有力守護大名・国人領主に許された呼び名)
			板垣信方	さ ふれいもの 下がれ、無礼者めが。軍議の最中であるぞ。
			家来2	との しかし、殿。
				い これだけは言わせてください。
				おくがたさま いま ようがい さん ふもと せきすいじ 奥方様が、たった今、要害山の麓、積翠寺にて
				たま おとこ こ しゅっさん 玉のような男の子を出産なされました。
			武田信虎	わ こ う てて、和子が生まれたとな。それは目出度い。
			はんで	みかた もの し いそ はんで味方の者どもに知らせろし。急げし。
				はや (* はんで…早く)
	下平		家来1・2	しもて たかだい か のほ は、は一つ。(下手高台へと駆け上る)
			板垣信方	いたがき のぶかた うれ この板垣信方、嬉しゅうございます。殿、でかしましたな。
			家来1	みな もの お やかた さま よつ う 皆の者一、御屋形様に、お世継ぎがお生まれになったぞ一。
			家来2	おお な ごえ じょうぶ わ こ さま 大きな泣き声の、丈夫そうな和子様じゃ一。
			家来1	み おお、見てみろし。わが軍の、あの意気込みよお。
			家来2	ふくしま ぐんぜい あわ 福島軍勢が、慌てふためいとるだで。
	下平 F・O		家来1・2	かちどき かちどき あ 勝鬨じゃ一、勝鬨を挙げよ。それ、えい、えい、おう一。
	中高		武田信虎	は、は、は、は、あつはははは一。
		赤子 S・E		あかご な ごえ (赤子の泣き声)
	上高	積翠寺	武田信虎	かみて おく たかだい (上手奥の高台へと)
				あかご のぞ み でかしたぞ、おまん。ようやった。(赤子を覗き見る)
				かお りり おやじ おう、顔だちも凜々しいのう。親父にそっくらじゃんか。
				いま 今にきっと、このぼこは天下をとるぞ。
			侍女浅葱	あい、まことにまことにほうずらあよ。御屋形様の
				よろこ きげん かお ひさ あの喜びよう。機嫌のいい顔は久しぶりだがね。
			侍女澤	さいさき よ なに たけだけ 幸先の良いことで。何しろ、武田家の
				あとつ う 跡継ぎがお生まれになっただで。

	大井夫人	大井夫人	だども、おまん様、なんと気の早いことずらあよ。
	国人	板垣信方	奥方様は、この甲斐の国生え抜きの国人の中でも最強の
	大井信達		大井信達殿の娘ごとして、椿城から嫁いでこられ、
			初の男子ご出産。お手柄でございましたなあ。
	大井夫人		信方殿、有難いお言葉。痛み入ります。思えば15歳で
			甲斐の国の守護となられた信虎殿の若さを侮り、
			我が父、大井信達は駿河の今川氏親殿と手を結んで
			武田に戦いを挑んだ。
	侍女浅葱		戦は二年にも及び、両軍が疲れ果てたところでようやく
			和睦となり、その証として奥方様がお輿入れなされたでございす。
	侍女滞		美しい奥方様を迎えて天にも昇る想いの御屋形様は
			一気に甲斐の国を纏めなされた。
	大井夫人		この要害山の麓から眺めおろす古府中の里。
			今はなんと美しく穏やかなこんずら。やがては
			この甲斐の国の其処彼処に、法螺貝が鳴り響き、
			沢山の軍勢が行き交う戦場となると思うと。
	侍女浅葱		奥方様、ご心配はお体に障りますいね。
	侍女滞		少しお休みになった方が。
	大井夫人		この子も、やがては大将として采配を振るう日が
			来るずらね。板垣殿、
			これまで殿にお仕えして下さった ほんのように、
			これからもどうか、この子ん行く末を見守ってやってくろっし。
			心からお願い申しますいね。
	板垣信方		奥方様、もったいのうございする。
	太郎勝千代	武田信虎	決めたぞ、決めたぞ。この子ん名前は勝千代じゃ。
			武田太郎、勝千代。
			今川勢を破り、我が甲斐の国に勝利をもたらして
			くれたのじゃからのう。

				よいな、勝千代、よっく聞け。
				我が武田の夢は、京へ上って天下を取る事じゃ。
				じゃが、京への道を開くは、容易でない。
				南の、下総・伊豆・相模には北条が、駿河・遠江には今川が
				この甲斐を狙って、いつまた攻め込んで来るやも知れん。
				甲斐は、山また山の狭い領国じゃ。
				田畑がもっともっと広く豊かでねえと、民も兵も養えん。
				そのためには、まず北の信濃の国を手に入れることずらよ。
外観館↑	上高 F・O			勝千代、勝って勝って勝ちぬくのじゃ。わはははは・・・。
	平中 上 高	動画 煙	M	F・IしてB・G
	E・F 戦場		第二景 甲斐の国・上野城(椿城)界隈の戦場にて	
		椿城 文字	出演	やよい、夏美、撫子、桔梗、卓緑、小雪、雫、きさらぎ
			やよい	お頭、こっちにやもつと屍が転がっていますよ。(と下手奥を見て)
		ススキ	夏美	首のねえのやら、腕のちぎれたのやら、おお、怖い。
			撫子	お頭、上等な代物が見つかりましたぜ。(と、上手から)
			桔梗	そうかい、そうかい。みんな、よくやった。今日はこのくらいに
				して、引き揚げようか。(中央高台から)
				(次々に引き剥いだ獲物を手に手に現れる。)
			M	F・O
			つくし	へーい、親分。あたいは、これだけ。(兜を手に)
			桔梗	おう、でかしたな、つくし。
			やよい	あたいは、なんだか大当たりのようで。(大袋を引きずって、
				中の食糧やらを取り出して見せる)
			夏美	おいらは、なんと銭袋でえ。
			やよい	あっちの足軽の懐からにぎりめし、貰ってきましたぜ。
			夏美	そいつを食わねえうちに、討たれちまったんだね。(泣く)
			桔梗	戦場で死人から引き剥ぎをしちゃあ、荒稼ぎする俺等だ。
				無用な情けは懸けるんじゃねえ。

			夏美	でも、お頭 <small>かしら</small> …あんまり <small>あわ</small> 哀れで。
			やよい	この世は食 <small>よ</small> うか食 <small>く</small> われるか。弱 <small>よわ</small> い者はお陀 <small>もの</small> 仏 <small>だぶつ</small> しかねえよう。
			空 撫子	お頭 <small>かしら</small> 、しばらくは、この甲斐 <small>かい</small> に落 <small>お</small> ち着 <small>つ</small> くんですかい？
			夏美	何 <small>なん</small> だか、山 <small>やま</small> ばかりで空 <small>そら</small> が広 <small>ひろ</small> く見 <small>み</small> えねえところだねえ。
			やよい	しょうがないだろ、夏美。戦場 <small>なつみ</small> を回 <small>いくさ</small> って旅 <small>まわ</small> から旅 <small>たび</small> 。
				血 <small>ち</small> の匂 <small>にお</small> いのするところ、神出鬼没 <small>しんしゅつきぼつ</small> のあたいら
				引き剥 <small>ひ</small> ぎの女盗賊 <small>おんなとうぞく</small> 7人組 <small>にんぐみ</small> だからよ。
		童画煙 F・O	各自	(やよい、夏美、撫子、小雪、早緑、雫、きさらぎ、如月、つくし <small>おのおの</small> と各々名を)
			全	そしてお頭 <small>かしら</small> 、桔梗 <small>ききょう</small> 様 <small>さま</small> 。
			つくし	あたいら、みんな、戦場 <small>いくさ</small> で親兄弟 <small>おやきょうだい</small> が死 <small>し</small> んじまって
				ピイピイ泣 <small>な</small> いてたところを、お頭 <small>かしら</small> に拾 <small>ひろ</small> われて
			全	今 <small>いま</small> じゃ泣 <small>な</small> く子 <small>こ</small> も黙 <small>だま</small> る女盗賊 <small>おんなとうぞく</small> ってわけ。
			桔梗	噂 <small>うわさ</small> じゃ、この甲斐 <small>かい</small> の国 <small>くに</small> 、武田信虎 <small>たけだのぶとら</small> と言う領主 <small>いりょうしゅ</small> は、
				足利将軍 <small>あしかがしょうぐん</small> 義晴 <small>よしはる</small> から、「甲斐 <small>かい</small> の猛虎 <small>もうこ</small> 」っておほめに預 <small>あず</small> かった
				そうじゃないか。
			つくし	モウコってなんだ？
			やよい	もうこってなあ、ほれ、二度 <small>にど</small> ばかし海 <small>うみ</small> の向 <small>む</small> こうの遠 <small>とほ</small> くの国 <small>くに</small> から
				攻 <small>せ</small> めてきただろ、三百年 <small>さんびやくねん</small> ほど前 <small>まえ</small> に。
			全	ちやうで一、ちやうちやう。
			桔梗	ったく一、しょうがねえなあ、お前 <small>まえ</small> ら。いいか、モウコってなあ
				猛 <small>たけだけ</small> 々 <small>とら</small> しい虎 <small>わ</small> 。分 <small>わ</small> かったか。
	夕景		つくし 早緑	あったかいんだから一。
	上高 F・O	S・E カラス	夕空 全	(こける)
			桔梗	日 <small>ひ</small> も暮 <small>く</small> れてきた。そろそろ、ねぐらに引 <small>ひ</small> き上 <small>あ</small> げるとしようぜ。
			やよい	それじゃお頭 <small>かしら</small> 、みんなしていつものあれだね。
			全	戦場 <small>いくさ</small> に命 <small>いのち</small> はてた皆々 <small>みなみなさま</small> 様、
外観 館↓	平中 F・O			あたいらのこと恨 <small>うら</small> まねえで、どうか安 <small>やす</small> らかに成 <small>じょうぶつ</small> 仏 <small>ぶつ</small> してくだせえ。
第三景 父と子 そして 元服				

			出演	たけだのぶ とら ちやくなん たろう かつ ちよ さい じろう のぶしげ さい いたがきのぶかた おおい ふじん、 武田信 虎、嫡男・太郎勝 千代 13 歳、次郎信繁 9 歳、板垣信方、大井 夫人、
				やよい、なつみ しずく きさらぎ 夏美、寧、如月
			文字	たろう さい うえすぎとも おき むすめ めと 太郎は13歳で、上杉朝興 の娘を 娶る。
				むさしのくに せんごくだいみょう おうぎやつうえすぎけ どうしゅ 武蔵国の戦国大名で、扇谷上杉家の当主。
	中高 中 平		据え者	武田 信虎 す もの ぎ 据え者切りじゃ。
				次郎 す もの ぎ のぶかたの さい 据え者切りとはなんじゃ、信方殿。(8歳)
				板垣 信方 とら つみびと ひ す き す 捕えた罪人を引き据えて、切り捨てることでござる、次郎様。
				武田 信虎 たろう ひとたち き す み 太郎、一太刀で切り捨てて見よ。こやつは罪を犯した故、 見せしめにするのじゃ。
				太郎 しゆんじゆん (逡巡する)
				武田 信虎 なに くすぐず どうした、何を愚図愚図しておるのじゃ。
				では、じろう 次郎、やってみよ。
			次郎 信繁	次郎 信繁 はっ。(バツサリと切り捨てる、丁寧な供養をする)
				ゆる くだ ぬし ひと こ ほとけ つみ き お許し下されよ。お主らも人の子。仏になれば罪は消えた。 まわす じょうぶつ め 迷わず成仏召され。
				武田 信虎 じろう のぶしげ そち みごと うてまえ どきょう す 次郎信繁、帥は見事な腕前じゃ。度胸も据わっておる。
				はは じゃ に すがた かたち きしょう うつく やさ 母者によく似て姿 容ばかりか、気性も美しく優しいのう。
			嫡男	ひ か たろう なん ぶざま ちやくなん おとこ 引き換え、太郎は何ちゆう無様な。嫡男ともあろう男が す もの ぎ なさ じろう とも 据え者切りすらできぬようでは。情けない(次郎と共に き 去ろうとする)
				太郎 ちちうえ ま くだ わたし 父上、お待ち下され。私は・・・
				わたし ちちうえ じまん めいば おに かげ ゆず いただ 私に、父上ご自慢の名馬、鬼鹿毛をお譲り頂けませぬか。
				武田 信虎 なに めいば おに かげ ゆず う 何、わしの名馬、鬼鹿毛を譲り受けたいと。
			十丈	たわけめ じゆうじょう たわけめ。十丈(30メートル)の堀を一つ跳びに飛び越える おに かげ そち うつ もの の おも あの鬼鹿毛を、帥ごとき空け者に乗こなせると思うか。 そち いま げんぶく まえ は げんぶく あかつき 帥は未だ、元服前ではないか。晴れて元服した暁には
			御旗 楯無	わ たけだけ だいだい つた みはた たて なし おおよろい かわ 我が武田家に代々伝わる、御旗と楯無の大鎧に加えて おに かげ いっしょ つか おも 鬼鹿毛も一緒に遣わそうと思うておった。

				それまで待と申すのが不服か。ならば勝手にせい。
	太郎	ちちうえ		父上！（と、去りかける信虎の背に）
	大井夫人	お やかたさま		御屋形様、どうぞこの私めに免じてお待ちくださいませ。
		たろう		太郎、そなたは何故に、鬼鹿毛を今、所望するのじゃ。
		ちちうえ		お父上のお言葉が分かりませぬか。
	太郎	ははうえ		母上、太郎は今、13歳。元服は間もなく致しましょうとも、
		ただけ		まだ、武田家に代々伝わる家宝の御旗楯無をお譲り頂く
				には、早すぎます。
		みはた		御旗は、源氏の棟梁、源 頼義公が後冷泉天皇より
		たまわ		賜った日の丸の旗。
		たて なし		楯無は源 頼義公の祖先、新羅三郎義光公が着用して
		おおよい		いた大鎧。どちらも大切な品故、武田家の跡目を継ぐ折に
		ちやうだい		頂戴しとうございます。
		しゆんめ		なれど、駿馬であろうと鬼鹿毛は荒馬。今から乗りこなして
				おかずば、戦の時に役にお役に立てられませぬ。
	大井夫人			そなたの気持ち、この母はようわかりました。
		お やかたさま		御屋形様、太郎は武田家の来し方行く末をしかと
		みさだ		見定めておるように思われます。
		たろう		太郎の願いを聞き届けてやっでは頂けますまいか。
	武田信虎			ええい、帥までが何を申すか。
		かどく		家督相続を決めるは、このわしぞ。太郎、よっく聞け。
		ちやうなん		長男があとを継ぐと、誰が言った。戯言ばかり
				ぬかし居ると、跡継ぎは次郎にしてしまうぞ。（去る）
	板垣信方	たろう		太郎様、この板垣信方、お気持ち、よっく分かり申す。
		ただけ		武田家は代々、跡継ぎは嫡男と決まっておりますでな。
		かり		仮にも嫡男の太郎様を差し置いて、次郎様の名を
		くち		口にすると、御屋形様もいささか軽はずみ。
				これが災いの火種にならぬとよいが。

			大井夫人	しんぼう 辛抱するのですよ、太郎。
				おも 思えば、そなたの父、信虎殿も14歳でお父上・信縄様
				から家督を相続なさせて、第18代当主になられた。
			板垣信方	ういじん 初陣は15歳、実の叔父上との戦に大勝利。
				さい 22歳で、大井の方様の父上と対戦。
			大井夫人	そうして戦は彼は2年も続き、両軍ともに疲れ果てた頃、
				わたし 私がお父上の元に、和睦のための輿入れをしたのです。
				あらし 争いの絶えなかった甲斐の国を、一つに纏められたは
				たし 確かに信虎殿の並々ならぬ胆力と
				さき 先を見通す力あってこそ。それは真です。
				そなたは父上のご気性によく似ておるゆえ、
				この母は心配じゃ。
			M	ギターブリッジ
外観館↑	中平 F・O		太郎	はほうえ 母上……。 (女盗賊たち、その様子を上手から覗き……)
	上平 中 平		やよい	おやおや、さしもの武田家も雲行きがちつとばかり
				あやしくなってきたようだねえ、如月。
			如月	うん、やよい。
				不運なことに、上杉朝興様から迎えた奥方が難産で
				哀れ母も子も死んでしまった。
			雫	これにや、太郎殿もいたく嘆かれた。
			夏美	無理もねえやな。その時まだ太郎様は14歳だったずら。
			やよい	やがて、太郎様は16歳で、晴れて元服。
			夏美	名を武田太郎晴信と名乗ることになった。
			雫	何でも、晴の文字は第12代將軍足利義晴様から贈られた
				んだってねえ。
			如月	信と言う字は、武田家代々の大切な文字。
	中上平 F・O		女賊全	武田晴信。いい名だねえ。
内部館↓			文字	この年、上杉謙信生まれる。そして3年後の甲斐

第四景 三条夫人輿入れ			
			出演 たけだのぶとら さい おおい ふじん さい はるのぶ さい さんじょうふじん さい 武田信虎 44歳、大井夫人 40歳、晴信 16歳 三条夫人 15歳、
			いまがわよしもと のぶしげ さい ね ね いほまい さい のぶかど さい (または さい) 今川義元 18歳、信繁 12歳、彌々(異母妹) 8歳、信廉 5歳(または 8歳)
			じじょ ひなの じじょ くちなし かしょう ぶよう ひとびと 侍女・鄙乃 侍女・梶子 歌唱と舞踊の人々
中高→ 下高		今川 義元	今川 義元 のぶ とら どの ほんじつ めでた 信虎殿、本日はまことに目出度いことよのう。
			きょう みやこ さだいじん さんじょう きん より こう そくじょ むか はるのぶ 京の都から、左大臣 三条公頼公のご息女を迎え、晴信
			どの しゅうげん かな もう なかだ それがし だい まんぞく 殿との祝言が叶い申した。仲立ちをした某も大満足。
			さくねん ほうじょう かい せ い おり 昨年、北条がこの甲斐に攻め入ってきた折に、
			うえすぎ ともおき どの おだわら へい だ くだ ゆえ 上杉朝興殿が、すぐさま小田原に兵を出して下された故、
			ほうじょう かい こうりやく あきら おだわら ひ あ 北条は甲斐攻略を諦めて小田原に引き上げたそうじゃな。
			うえすぎどの はるのぶどの よめ ご むか むす それもこれも上杉殿から晴信殿に嫁御を迎えて結んだ
			どうめい なんざん な よめ ご ぶびん 同盟のおかげ。難産で亡くなられた嫁御は不憫じゃが。
		武田 信虎	こんど よめ ご からだ じょうぶ 今度の嫁御は、体が丈夫かのう。
			みやこ ひめ ぎみ い しんぱい 都の姫君と言うからに、ちと心配じゃよ。
		今川 義元	なになに あん およ ちゅうおう たかだい いどう 何々、案ずるには及ばぬて。(中央高台へ移動)
			なかなかの女丈夫と聞き及んでおりまする。
		御裏方	あねうえ ほそかわ はる もと とつ いもうと ほんがんじ お うらかた 姉上は細川晴元に嫁ぎ、妹ごは本願寺の御裏方でな。
中平			(* 御裏方…貴人の奥方または本願寺門主の夫人)
下高 F・O			さすが めいもん ちゅう めいもん さんじょうけ さだいじん い 流石は名門中の名門三条家。左大臣と言うのは、
		武田 晴信	せつしょう かんぱく つ ぐらい うわき なん 撰政閑白に次ぐ位じゃからのう。おう、噂をすれば何とやら。
		三条 夫人	三 条 夫 人 あらためまして、お初にお目にかかります。
			わらわは、京の都、三条家からこの地に嫁いで参りました。
			おもう様、おたあ様(晴信がささやく) いえ、
			ちちうえさま ははうえさま みやこ つ まい じじゅう 父上様、母上様、都より連れて参りました侍従ともども、
			いく ひさ ねが もう あ 幾久しく、よろしゅうお願い申し上げます。
		侍女ら	れい (礼をする)
		武田 晴信	ちちうえ ははうえ しゅうげん めでた おわ きょうえつごく 父上、母上、祝言も目出度く終り、まことに恐悦至極に
			ぞん いまがわ よしもと どの いっこん かつむ 存じまする。今川義元殿、さ、あちらで一献傾けて

				くだ 下さりませ。
				のぶ とら よしもと はるのぶ えんせき (信虎、義元、晴信 宴席へ。)
			大井 夫人	なが たびじ つか 長の旅路、さぞお疲れでござろうな。
		信繁	信繁	どうぞごゆるりとなされませ。
		禰々	禰々	なんと美しいお姫様。
		信廉	信廉	おははうえ おな きれい 御母上と同じくらい綺麗じゃ。
		三条 夫人		あら、まあ、ほほほほ。かわい いもうぢみ おとうぢみ 可愛らしい妹君、弟君ですこと。 お母上様、わらわは、輿の中から初めて見る 富士の高嶺に胸躍らせておりましたゆえ、 疲れる暇もござりませなんだ。
		大井 夫人		まあ、それはようございましたなあ。
		鄙乃 梶子		きょう みやこ さんじょう ひめさま まも まい 京の都より三条の姫様をお守りして参りました
		梶子		くちなし もう いご みし 梶子と申します。以後お見知りおきを。
		信繁		くち くちなし 口があっても梶子とはこれいかに？
		梶子		やま やまなし い ごと 山があっても山梨と言うが如し。 ついでに申せば、川が幾つ流れていても三河
		鄙乃		ちか あ とおとうみ 近くに在っても遠江。
		鄙		ひな の もう なまえ ひな なん いんが おお、わらわは鄙乃と申します。名前が鄙とは、何の因果か、 このような山深い田舎におともすることになろうとは。 みやこ お むらさききぶ せいしようごん 都に居れば、紫式部や清少納言はたまた ピース又吉さんのような芥川賞作家にもなっております…
		三条 夫人		ひな の ははうえさま まえ ふ ま これ、鄙乃、母上様の前ではしたない振る舞い、 お控えなさい。
		鄙乃		い みやこ そだ ひめさま そう言われましても、都育ちの姫様、 ひな やまくに く たいくつ 鄙びた山国での暮らしには退屈あそばします、きっと。
		信廉		あいさつ そこ ねえねえ、おまんさま。ご挨拶は其処までにして、 あちらで遊ぼうよ。
		鄙乃		あそ いみ ちご 遊ばしますの意味がちと違っておりますが。

				これだから山国育ちは…
		信繁	さかなすく むしと かい くに なん	魚掬いも虫取りも、甲斐の国では何でもできるのだよ。
		鄙乃	むし だいきら ゆえ	お、お、おやめくださいまし。虫は大嫌い故…
		彌々	なん かわいい おけら	え一つ、何で？可愛いのに。螻蛄もフンコロガシも。
		信廉		クマムシもいるよ？
		鄙乃	い	居るわきゃないでしょ。
		信繁	へび かわいい	おけらも蛇も可愛いのに、そら一つ。(と、小蛇を取り出し)
		鄙乃	ひめさま	きゃー、あれ一つ、姫様、たふけてくさいまひなー。
			こ にん とも しても そで	(子ら3人と共に下手袖へ。マイク受け渡し)
		梶子	ぶれい もう	まことに、ご無礼申しました。
		大井夫人	さんじょう かたさま わたし たけだけ き は じゅうろく ねん	三条の方様。私は、この武田家に来て、早や十六年。
			とつ	嫁いできたころは、
			にわ つばき み わ つばきじょう こい	庭の椿を見るたびに、我が椿城を恋しがっておりました。
		三条夫人	つばき じょう	椿 城…
		大井夫人	ちか つばき き たくさん は	近くに椿の木がそれは沢山生えておりましたから、
			ひと よ つばきじょう	人呼んで椿城。
		三条夫人	はほうさま つばき はな せい	お母上様は椿の花の精なのですね。だって、椿は
			ふきつ お はら	まがまがしき不吉なものを追い払い、
			ち どめ はたら い	血止めの働きもすると言います。
			わたし はほうえ	私も母上のようにになりたい。(子らと共に踊る)
		M	はい	イントロ入り
舞踊		歌唱 舞踊	かど かたやまつばき なれ	わが門の片山椿 まこと汝
			て ふ つち お まんようしゅう まき	わが手触れなな 土に落ちもかも (万葉集 巻20—4418)
		文字	わ や かど き つばき はな ほんとう まえ	我が家の門に咲く椿の花よ 本当にお前は
			わたし て ふ つち お	私が手で触れずとも 土に落ちてしまうのか
		大井夫人	つばき き す	椿の木がお好きでしたか。
		三条夫人	みどり は	はい、つややかな緑の葉に、ぽつたりとあでやかな花を
			き まさき はる つ	咲かせ、真っ先に春を告げてくれます。それに、

				はらりと散る時の、あの潔さも。
			大井夫人	まあ、都の姫様とも思えませぬこと。
			二人	(笑う)
	舞踊		M	イントロ入り (都への郷愁そして繁栄を願う歌と踊り)
			合唱舞踊団	愛しき人の住む里へ 都を遠く離れ来て
				四方の山並み 見上げれば
				峰には春の霞たなびき 野辺の小道に紅椿
				ああ 椿よ椿 お前 <small>こころ</small> に心があるならば
				つぶらなまろい実 た一んとつけて 栄えておくれ永久までも
				(万葉集 巻19-4119)
			大井夫人	今宵はこれまでに致しとうござりまする。
内部館↑	全 F・O		M	F・I して B・G
	雪 EF			信濃の国 南佐久郡 南牧 海ノ口城 武田晴信16歳
陣幕↓		海ノ口城	第五景	晴信初陣 南佐久郡 海ノ口城攻略
			出演	いたがきのぶかた 板垣信方、あまりとらやす 甘利虎康、たけだのぶとら 武田信虎、たけだはるのぶ 武田晴信、へいし 兵士たち
				こゆき なでしこ きみどり 小雪、撫子、卓線、つくし たまき さい きよ さい 環 13歳、佐容 18歳
	百舌鳥 S・E	板垣信虎	板垣信方	お やかたさま きょう ひとつき 御屋形様、今日で一月たちましたぞ。この海の口城、
	中平	甘利		聞きしに勝る手ごわい相手でござりましたな。
			甘利虎康	ひらが げんしん さんぜん へい も たて こもり、平賀源心め、三千の兵を持って立て籠もり、
				この上なお、籠城戦を続ける覚悟にござる。
			板垣信方	く おお せま さむ さむ みかた しき 暮れも押し迫り、この寒さでは、どうも味方の士気も
				あ 上がりませぬぞ。
			甘利虎康	おおゆき きゆう こうばい やまみち すず すず 大雪で急 勾配の山道を進むに進めず、
				ひょうりゅう ま そこ ありさま 兵糧も間もなく底をつく有様。
				いったん へい ひ あ ゆきど はる ま でなお 一旦、兵を引き上げて、雪解けの春を待って出直しては
				いかがかと。
			M	F・O
			武田信虎	う一む、おおい さだ たか ひらが げんしん らいはる め もの う一む、大井貞隆、平賀源心。来春こそは目に物

				み 見せてくれようぞ。
				みな もの あす そうちよう じん はら てつたい いた 皆の者、明日の早朝、陣を払い撤退と致一す。
			武田 晴信	お やかたさま みようちよう かえ じん はるのぶ 御屋形様、では、明朝、帰りの陣は、この晴信に
		しんが り		しんがりをお申し付け下さりませ。
				(* 隊の最後部で、敵の追撃を躲し、本隊の安全を図る役割)
			武田 信虎	なに きみよう ゆき 何、これは奇妙なことを。この雪では、敵が追いかけてくる
				おそ ちやくなん なにゆえ 怖れもなからう。嫡男ともあろうものが何故にしんがりを
				のぞ 望むか。よし、わしが帥にしんがりを申付けたらば、
				おとうと のぶしげ 「弟 信繁にしんがりを」と言うてこそ、初陣を果たした
				ただけ ちやくなん ほこ い もの 武田家嫡男の誇りと言う物ではないか。
				まった まえ ふがひ 全くお前ときたら、いつになっても不甲斐ないのう。
				あき 呆れたわ。
			武田 晴信	お やかたさま なん おお はるのぶ 御屋形様、何と仰せられましようとも、この晴信に
				ぜひ つと いただ 是非ともしんがりを努めさせて頂きとうござりまする。
			武田 信虎	はるのぶ かって よい (たち去る) ぬぬっ、晴信め、勝手にするが良い。
		鼻 S・E	武田 晴信	みな もの こい めし く さあ、皆の者、今宵はたらふく飯を食っておけよ。
				さけ あ の それ、酒も浴びるほど飲んでおくのじゃ。
	中央 F・D			あす あさはや うま くら 明日は、朝早いぞ。馬の鞍はそのまま付けておくのじゃ。
	平前		兵士 1	しんがりを努めたいなど言い出して、何をされるかと思いきや
				これではまるで、戦に臨むようなやり方ではないか。
			兵士 2	ああ、敵が追いかけても来ぬと言うに、なんとしたこと。
			兵士 3	やはり、晴信様は、御屋形様が仰せの通り、空け者かのう。
			兵士 たち	まった まった かしこ し もの わ (全く全く、賢いやら痴れ者やら…分からんのう。ハハハ…)
		小鳥 S・E	武田 晴信	おきよ しゅつたつ 起きよ。出立じゃ。
			兵士 1	な、なんじゃ、今、何時じゃと思っておる。
			兵士 2	まだ、夜明けまでには一時もあるに。
			兵士 3	何をしようってえのですかい。
			武田 晴信	よ いま うん ぐち じょう 良いか、今から海の口城へとってかえすぞ。

				攻め込むのじゃ。
			板垣 信方	わかとの わへい さんびやく てき さんぜん たぜい ぶぜい 若殿、我が兵は三百。敵は三千、多勢に無勢。
				勝ち目はありませぬぞ。
			武田 晴信	てき たけだ ひ あ おも ゆだん お ちが 敵は、武田が引き上げたと思ひ油断して居るに違いない。
				しょうがつ ちか ゆえ おおかた へい いえ かえ 正月も近い故、大方の兵は家に帰ってしまったであろう。
				いま われ たけだ おそ み 今こそ、我ら武田の恐ろしさ、見せてくれよう。
	下高			もの あと つづ 者ども、後に続けー！
	中平 F・O		兵士 たち	おうー！(上手平場から下手高台へと)
			小雪	な一るほど。そういうわけだったんだね。
			撫子	あんなに、しんがりを努めたいって言っていたのは。
			早緑	てきち ひ かえ きしゆう こうげき 敵地へ引き返して、奇襲攻撃をかけたかったんだ。
			小雪	てき あざむ みかた 敵を欺くには、まず味方から ってね。
			撫子	これ、戦国の世の常識。
			つくし 早緑	ちよっと気を緩めると、滅ぼされちまうんだから。
			四人	いつ なにごと ゆだんたいてき 何時でも何事も、油断大敵 ってことだね。
			撫子	ま、あたいらは うらざりっこなし。
	下高 F・D		つくし 撫子	これ、庶民の常識 ってわけ。
			兵士 1・2	じ ぎむらい ひめ と お (地侍が姫たちを取り押さえ…)
	上奥→ 中平		環	あねうえ あねうえ きま たす たまき ねえさま はな いや 姉上、姉上様、助けてー。環は姉様と離れるのは嫌じゃー。
			佐容	ねが わたし き よ お願いでござりまする。私は、この佐容はどうなっても
				かま いもくとたまき たす くだ 構わぬ。妹・環だけはお助け下され。ええーい。
				たけだ のぶとら ちち う と ようしゃ 武田信虎一、父を討ち取っただけでは容赦ならぬか。
				よわ おんな こ とら つ ゆ きき だいぼさつとうげ きた か弱い女子どもを捕えて、連れ行く先は大菩薩峠の北の
				くろかわ きんざん いっしゅう やみ と こ きん ほ つづ 黒川金山なのか。一生闇に閉じ込められて、金を掘り続け、
				よう す き ようざん うず 用が済めばバツサリと切り捨てて金山に埋めるとな。
			環	あねうえ あねうえ いっしゅう いっしゅう なに こわ 姉上、姉上と一緒にいたい。一緒ならば何も怖くはない。
				たまき かわい くだ あねうえ とも きんざん 環を可愛がって下された姉上と共に、金山でもどこでも。
			佐容	たまき しんしゅう さく いわむらだ 環一。しっかりするのじゃ。そなたもこの信州佐久・岩村田に

				な とどろ 名を轟かせた平賀源心の娘ぞ。金山衆の相手をする
				あそ め 遊び女にされようと飯炊き女にされようと、
				どんなことをしてでも、生き抜くのじゃぞー。
	中平 F・O		環	あねうえ ふたり かみしも わか ひ た 姉上ー。(二人は上下へ別れ引き立てられて行く)
	下高 F・U		小雪	あーあー、気の毒で見えられねえやな。オット、そうこうするうち
陣幕↑	下高 F・O	軍馬 S・E		はるのぶさま かい くに こ ふちゆう もど 晴信様が甲斐の国・古府中へ戻りなされたようだよ。
	雪 F・O	躑躅が 崎館		かい くに こ ふちゆう つつじ ききやかた 甲斐の国 古府中 躑躅が崎館
外観 館↓			第六景	父・信虎追放
			出演	たけだ はるのぶ たけだ のぶとら さんじょうふじん ね ね おおい ふじん 武田晴信、武田信虎、三条夫人、禰々、大井夫人、ヤマトタケル
				あまり とら やす いたがきのぶかた ぼぼ のぶはる ぶしろう ひやくしろう けいご へい 甘利虎康、板垣信方、馬場信春、武将たち、百姓たち、警護兵1・2
	中平		武田 晴信	お やかたさま はるのぶ さんびやく てげい うん ぐち じょう 御屋形様、晴信、三百の手勢にて海の口城を
				せ お てきしろう ひらが げんしん みしるし 攻め落とし、敵将・平賀源心の首級
				しかと討ち取りましてござりまする。
			武田 信虎	なんと。
				はるのぶ なぜ もど 晴信、何故、戻ってきた。
			武田 晴信	はっ。
			武田 信虎	しろ お 城を落としたりば、その守りを固めて城に残るは必定。
				だのに、なぜ帰ってきたかと聞いておるのじゃ。
				はは一ん、さてはお主、返り討ちが怖ろしゅうて逃げ帰って
				来たか。尻尾を巻いて退散と言うわけじゃな。
				ろくすっぽ、兵も居らぬ城を落としたからと言って、
				てがら がお 手柄顔はさせぬぞ。この臆病者めが。(去る)
			武田 晴信	ちちうえ ちちうえ 父上、父上はどうかして居る。何故に、褒めてくれぬ。
				おれ はるのぶ 俺は、晴信、よくやったと、一言労ってほしただけじゃ。
				かどく たから なに い なぜ わ 家督も宝物も何も要らぬ。何故、分かってくれぬのじゃ。
				ちゆうおう ひらば まえ (中央平場前へ よろめき出る)
			三条 夫人	あなた様、そのようなやつれたお姿で、いったいどうされた
				のでござりまするか。この三条にお聞かせ下されませ。

				つらい <small>こころ</small> <small>うち</small> 辛いお心の内を。
			武田 晴信	<small>さんじょう</small> <small>ふじん</small> (三条夫人にもたれる)
			三条 夫人	<small>いま</small> <small>むかし</small> <small>やまとたけるのみこと</small> <small>きゅうしゅう</small> <small>くまそ</small> <small>へいてい</small> 今は昔。日本武尊が九州の熊襲を平定し
				<small>やまと</small> <small>がいせん</small> <small>おり</small> 大和に凱旋なされた折のことでござりまする。
			大井 夫人	<small>はるのぶ</small> <small>いもうと</small> <small>ね</small> <small>ね</small> <small>おとうと</small> <small>のぶ</small> <small>しげ</small> <small>ともな</small> <small>ちかづ</small> (晴信の妹、禰々、弟 信繁 を伴い、近付きながら)
			禰々	<small>ちち</small> <small>おう</small> <small>ほ</small> <small>もら</small> タケルは父王に褒めて貰い、ようやったと
				<small>ねぎろ</small> 労ってもらえると思いきや、
				<small>ちから</small> <small>おそ</small> <small>ちち</small> <small>おう</small> <small>はげ</small> <small>ねた</small> タケルの力を恐れた父王は、激しく妬んだのですね。
		奥羽	三条 夫人	<small>つか</small> <small>いとま</small> <small>あ</small> <small>たける</small> <small>おう</small> <small>ちほう</small> 疲れをとる暇も有らばこそ、武尊はすぐさま奥羽地方へ
				<small>えみし</small> <small>とうぼう</small> <small>さ</small> <small>む</small> 蝦夷の討伐に差し向けられたそうにござりまする。そこで
				<small>たける</small> <small>おの</small> <small>さだめ</small> <small>う</small> <small>と</small> 武尊は己が運命をしかと受け止めたのでございましょうな。
	上高	日本 武尊	日本 武尊	<small>ちちうえ</small> <small>なぜ</small> <small>わし</small> <small>じつ</small> <small>むすこ</small> <small>たける</small> 父上は何故に、儂を、実の息子のこの武尊をこうまでも
				<small>うと</small> <small>ひとこと</small> <small>たける</small> <small>なぜ</small> 疎まれるのじゃ。ああ、一言、武尊ようやったと何故に
	上高 F・O			<small>い</small> 言うてはくださらぬのか。
			大井 夫人	<small>のぶ</small> <small>どら</small> <small>どの</small> <small>ま</small> <small>あね</small> <small>するが</small> <small>いまがわ</small> <small>よしもとの</small> <small>もと</small> 信虎殿は、間もなくそなたの姉を、駿河の今川義元殿の下に
				<small>とつ</small> <small>こころづ</small> <small>するが</small> <small>くに</small> <small>どうめい</small> 嫁がせるお心積もりじゃ。駿河の国との同盟のためにな。
				<small>たけだ</small> <small>のぶ</small> <small>とら</small> <small>ちやうじよ</small> <small>さい</small> <small>するが</small> <small>しゅご</small> <small>だいまよう</small> <small>いまがわ</small> <small>よしもと</small> <small>せいしつ</small> (武田信虎の長女 18歳で駿河守護大名・今川義元の正室となる。
				<small>のち</small> <small>じょうけい</small> <small>いん</small> <small>よ</small> 後、定恵院 と呼ばれる。)
			禰々	<small>あねうえ</small> <small>とお</small> <small>ところ</small> <small>こしい</small> 姉上は遠い所へお輿入れなさるのですか。
				<small>す</small> <small>し</small> <small>ひと</small> <small>ところ</small> <small>ね</small> <small>ね</small> 好きでもない、知らない人の処へ？そんなの、禰々は
				<small>ね</small> <small>ね</small> <small>あにうえ</small> <small>そば</small> <small>い</small> いやじゃ。禰々は、兄上のお側にいつまでも居たい。
			三条 夫人	<small>ね</small> <small>ね</small> <small>どの</small> <small>かた</small> まあ、禰々殿、なんといいらしいお方。
			大井 夫人	<small>よ</small> <small>か</small> <small>ちち</small> <small>こ</small> <small>あいだから</small> それにしても、いつの世も変わらぬ父と子の間柄。
				<small>おとこ</small> <small>おや</small> <small>あらし</small> <small>ごと</small> <small>はは</small> <small>こころ</small> <small>いた</small> 男 親なればこそその争い事。母は心が痛みまする。
				<small>いと</small> <small>おがた</small> <small>いか</small> なれど、そなたには愛しい奥方がおいでじゃ。如何なる
外観 館↑	中平 F・O			<small>やまさか</small> <small>ふたり</small> <small>の</small> <small>こ</small> 山坂も二人でならば、乗り越えてゆかれましよう。な。
内部 館↓			M	イントロ入って
			文字	<small>てんぶん</small> <small>ねん</small> <small>ねん</small> <small>しょうがつ</small> <small>たけだ</small> <small>はるのぶ</small> <small>さい</small> 天文7年(1538年)正月 武田晴信 17歳

	中平		重臣ら 合唱	(うた おど おんなしゆう はたすき 掛けで餅つき等)
				やんれ 目出度いことが重なりて
				嫁はとる 娘はよそへ嫁御に
		しとぎ お唐子		やんれ 目出度い物はしとぎ餅 (*しとぎ…神前に供える米粉の餅)
				お唐子で 捏ねて搗いたら丸める (*お唐子—石臼)
				やんれ 目出度い家の台所
				あさひ 朝日さし ゆうひ 夕日もさして輝く
				は一よい よーい よーいとな (歌詞:山梨民謡 参照)
			甘利 虎康	いやあ 久しぶりに踊ったぞ ちと足元がおぼつかぬがのう。
			板垣 信方	お主、まだ酒は入っておらぬで、些か年を召されたか。
				甘利虎康殿。
			馬場 信春	なんのなんの 身振り手振り なかなかの物じゃったぞ。
			甘利 虎康	ほんに目出度いぞ。嫡男、晴信様が嫁御を迎えられ
				長女の春美姫も今川義元殿に嫁がれて。なあ、馬場美濃守
			馬場 信春	我ら、武田の家臣もみな打ち揃って年の初めを寿げるとは。
				のう、板垣信方殿、そうではござらぬか。
			板垣 信方	ま、心配事はさておき、今日は祝いの日じゃ。
				皆も寛ぐが良からう。
			武田 信虎	(一家 連なり席に着く)
			板垣 信方	御屋形様、新年 明けましておめでとうござりまする。
			一同	おめでとうござりまする。
			甘利 虎康	この年も、お健やかにて賑々しくお過ごしなされんことを。
			一同	御願ひあげ奉りまする一。
			武田 信虎	皆の者、昨年の働き大儀であった。
				さ、祝い酒じゃ。
			武田 晴信	(腰を浮かせ、前に進み出ようとする)
			武田 信虎	次郎信繁、今年の杯は帥からじゃ。
			一同	(どよめく)

		信繁	武田 信繁	ちちうえ わたし じなん しょうがつ いわ さかずき 父上、私めは次男にございます。正月祝いの杯は
				ちやくなん あにうえ き 嫡男の兄上からと決まっているではござりませぬか。
				じゆんじよ ちが 順序が違っております。
			武田 信虎	なに もう いちばん さかずき じろう のぶしげ そち つか 何を申すか。一番杯は、次郎信繁、帥に遣わす。
			武田 信繁	しかし、父上。信繁はまだ若輩ゆえ、勿体のうござりまする。
				なにとぞ あにうえ つぎ う 何卒、兄上の次にお受けしとうござりまする。
			板垣 信方	お やかたさま お言葉ではござりまするが、いちばん さかずき 御屋形様、お言葉ではござりまするが、一番杯は
				あとつ たろう はるのぶどの 跡継ぎの太郎晴信殿からと。
				こたび うん くら せ お はるのぶどの てがら 此度の海の口城攻め落としも、晴信殿のお手柄あってこそ。
				きりよく たいりよく けつ おとうと のぶしげどの ひ と 気力体力、決して弟の信繁殿に引けを取りませぬ。
			甘利 虎康	なにゆえ たけだけ やぶ じろう のぶしげ どの 何故、武田家のしきたりを破ってまでも、次郎信繁殿に。
				がてん ゆ 合点が行きませぬ。
			一同	お やかたさま くちぐち 御屋形様(と、口々に)
			武田 信虎	わしがそう申して居る。それでよいのじゃ。
				かい くに ほつと 甲斐の国の法度は、このわしじゃ。わっはははは…。
				しょうがつ さん にち あ しなの せ てはし 正月三が日が明けたらば、信濃を攻めるぞ。手始めは
				さく へい いちまん あつ お よ (まき) 佐久からじゃ。兵を一方ばかり集めて置くが良い。(去る)
			武田 晴信	かみて ひらば で (上手平場によろばい出ながら)
				ちちうえ なぜ わたし きら じろう かわい 父上は、何故私を嫌う。次郎がそれほどに可愛いのか。
				わたし ぶつもん はい ならば、私は、仏門に入ろう。
				いくさ ば はな てら はい うた よ しず く 戦場を離れ、寺に入り、歌でも読んで静かに暮らそう。
				たけだけ じろう 武田家など、次郎にくれてやる。
				いくさ いくさ いくさ ちちうえ お 戦、戦、戦…。父上はどうかして居る。
	前平		板垣 信方	はるのぶさま しもて うなが 晴信様、さ、こちらへ。(下手に促す)
			武將 たち	はるのぶさま き たし いま かんじん など くちぐち 晴信様、お気を確かに。今が肝心ですぞ。(等、口々に)
	高台全 F・D		タブ ロー	した せりふ あいだ たかだい しもて かみて たみ ひやくしやう (下の台詞の間、高台下手から上手に、民百姓タブローの
				えが モブシーンが描かれる)
			甘利 虎康	かい くに さいがい つづ たみ ひやくしやう 甲斐の国はこのところ、災害続きで、民百姓は

				う 飢えに苦しんでおります。
			馬場 信春	じしん おおあめ こうずい はや やまい おおかせ く かえ おそ く ゆえ 地震、大雨、洪水、流行り病、大風が繰り返し襲い来る故、
				りょうみん き ね くさ ね 領民は木の根草の根をかじっても、飢えをしのげず、
				し 死ぬる者が増えるばかり。それも女子どもから先に…。
			甘利 虎康	これでは甲斐の国の行く末が、成り立ちませぬ。
			板垣 信方	それを、知ってか知らずか、御屋形様は
				りょうみん かんり 領民を顧みるところか、戦に次ぐ戦に駆り立てる始末。
			甘利 虎康	ふまん ちくせき かい くに 不満も蓄積し、甲斐の国は、危うくなってきてござる。
	高台 F・O		武田 晴信	どうすれば、どうすればよいのだ。
				あまり いたがき ばば おし そち かんが 甘利、板垣、馬場、教えてくれ。帥たちの考えを。
			板垣 信方	はるのぶさま ところ しず 晴信様、お心を沈めてよ一くお聞き下され。
				かい くに こくしゅ あなた さま 甲斐の国の国主に、貴方様がなられるのです。
			武田 晴信	わしが、わしが御屋形様になる。
				むほん お い 謀反を起こせと言うのか、このわしに。
			甘利 虎康	さよう 左様でござる。
			馬場 信春	てはず ととの 手筈は整っております。
				わかとの あねうえ はるみ ひめ いまがわどの こしい 若殿の姉上、春美姫が今川殿にお輿入れなさりましたな。
			甘利 虎康	お やかたさま のぶ たら こう ひめさま なぐさ もう 御屋形様、信虎公は、姫様をお慰め申すため、
				するが いまがわどの きげん うかが 駿河の今川殿にご機嫌伺いにお出かけなさる。
			板垣 信方	これぞ絶好の機会。その折に、信虎公を追放なさるのじゃ。
	中平 F・O		武田 晴信	ちちうえ ついほう 父上を追放…。
	上高			M ギターでブリッジ
			武田 信虎	するが ほねやす たび め ざわ ちやくなん はるのぶ 駿河に骨休めの旅に…そうじゃ、目障りな嫡男晴信を
				いまがわどの あず 今川殿に預かってもらう相談も出来ようというもの…。
				はるのぶ ついほう じなん のぶ しげ あとつ 晴信を追放したなら、次男信繁を跡継ぎにするぞ。
			警護兵 2人	のぶ たら ゆ て た (信虎の行く手に立ちはだかる)
			武田 信虎	なに するが いんきょ わし ついほう 何、駿河にて、隠居だと。この儂が…追放されたとな。ぬぬ。
	上高 F・O			はるのぶ 晴信め、よくもよくもだまし居って。板垣一、甘利一、馬場一。

御旗 楯無→			M	ギターでブリッジ
			M	続いてF・ILしてB・G
		文字		甲斐国主・武田信虎 駿河の国に追放 天文10年(1541年)6月
中平				武田晴信 甲斐国主となる。21歳。
			第七景 新しき国主と諏訪攻略	
			出演	武田晴信、甘利虎康、馬場信春、武田信繁、板垣信方
				諏訪人ら、頼隆夫人・白妙(頼重の母)、諏訪姫、やよい、雲、夏美、
				村人ら、百足1、諏訪頼重、彌々 歌唱・舞踊の人々
			武田 晴信	(家臣居並ぶ中へ、歩み座る)
			家臣	(礼)
			武田 晴信	この晴信、これより、甲斐の国主となった。
				父、信虎公は重臣らと相計り、駿河の今川殿にお預かり
				頂いておる。
				父をこの甲斐の国より追放と致した理由は、
				災害にあえぐ民百姓を顧みず、ばかりか戦に次ぐ戦で
				一家の働きがしらを狩り立てては、合戦に赴かせ、尚且つ
				飢饉の年も容赦なく重い税を取立て
				疲れ果てた民百姓を苦しめ続けてきたからじゃ。
				皆の知恵を出し合い、合議制の政により
				国の乱れを正し、民を救うことにひたすら努めてほしい。
				わしはまだ21歳の未熟者故に、儂が過ちを犯すことあらば
				直ちに意見し、まことの主にふさわしい者となるよう、どうか
				導いてほしい。領民の暮らしを守る甲斐の新しい国造り、
				今こそ皆で進めようではないか。
			家臣	(はは一つ、御屋形様、取り組みますぞ・・・等々)
			M	F・O
			甘利 虎康	御屋形様、よくぞご決心下されました。(涙ぐみ)
				この甘利虎康、今この時を待っておりました。

				荒れ果てた甲斐の国建て直し、まずは税の取り立てを
				手加減して下さりませ。さすれば、民百姓は再び勢いを
				取り戻すでござろう。
		武田晴信		うむ。もっともじゃ。馬場信春、帥はどう思う。
		馬場信春		その前に、しばらく戦を控えることこそ、先決でござる。
				戦を止めている間に、田畑に精を出しさえすれば、
				作柄も上出来になろうというもの。
		武田晴信		成程、その通りじゃ。
		武田信繁	武田信繁	兄上、釜無川と御勅使川、これら
				二つの川の氾濫こそ、甲斐の国の泣き所かと存じまする。
		武田晴信		信繁、よくぞ申した。我が弟ながら天晴れ。
				最前よりわしも思うておったは、その川の乱れを
				いかに治めるかと言うことじゃ。
				百姓は国の基、先を見据えた国造りに取り組んでこそ、
				甲斐の国を末永く豊かに出来よう。信繁、続きを述べて見よ。
		山峡	武田信繁	はっ。甲斐の国の名は、山峡から来ているといわれるごとく、
				この甲斐は四方を山に囲まれ、一度川が氾濫すれば、
		国中		国中(甲府盆地のこと)一帯は水浸しとなりまする。
				(と、地図を広げ)領民の暮らしを守り、年貢を増やすには
				先ず川を治めることが第一の決め手。
		武田晴信		では早速に、釜無川、御勅使川、荒川、笛吹川の
				堤防工事に取り掛かろう。何年かかろうとも成し遂げるのじゃ。
		文字		(信玄堤 着工より20年で完成)
				皆の者、異存あるまいな。(板垣に目で示唆)
		板垣信方		こちらは武田家先祖伝来の家宝じゃ。御旗とそして、
				新羅三郎頼光様のお召しになった鎧で、楯無と言う。
		武田晴信		御旗、楯無 ご照覧有れ。
御旗楯無一		一同		御旗、楯無 ご照覧有れ。御旗、楯無 ご照覧有れ

内部館↑	F・O			御旗、楯無 照覧有れ。(3回目はF・O)
		山と空	M	イントロ入って
	湖 E・F	文字		その一年後 信州諏訪
	中平		諏訪人ら	(諏訪人らの歌と踊り)(諏訪頼重・禰々・母・諏訪姫)
			歌唱舞踊	信濃ナ一 諏訪の湖 朝日に映えて
				出舟入船 賑わうところ
				湧き出るお湯に 揃うて頼えば
				花の顔 湯煙ににじむヨ一
				*ソーレソレソレ 諏訪は良いとこ そうずらヨ一
				お諏訪太鼓が ズンと 響いてくるヨ一 (*くりかえし)
		頼隆夫人	頼隆妻 白妙	さあさ、皆様方、今日の魚とりはいかがでござりましたな。
				おうおう、味噌の仕込みも、公魚の甘辛煮も、見事なお手並
				でござりまするなあ。流石、働き者と音に聞こえた諏訪人の
				手際の良さ。おかげ様で、諏訪の地も豊かな暮らし向きが
				保たれております。ほんに有難いこと。
			諏訪姫	お婆様、良いお日和でよろしゅうございます。
			頼隆妻 白妙	これはこれは諏訪姫、しばらく見ぬ間に一段と美しゅう
				なられましたな。
		ね・す 頼重	諏訪 頼重	母上、何くれとなくのお心遣いかたじけのう存じます。
				秋祭りの支度、滞りなく整ってござりまする。
	上高		やよい	ほ一ら、あれが諏訪頼重公。
				諏訪の領主で、かつ、諏訪大社の神様に仕える
			大祝	神官なのさ。大祝って言うの。
			雫	頼重の父と、武田晴信の父、信虎は、戦のあと
				同盟を結んだ。つ・ま・り、
			夏美	晴信の妹 禰々が、諏訪頼重の元に嫁いできたのさ。
	湖 F・O		タブロー 雫	そこまでは良かったんだけど。
	中高	竹笹と空	やよい	その頃の信州には、伊那に高遠頼継、

			夏美	木曾には、木曾義康、
	下高	江原	雫	松本の小笠原長時
		司	夏美	北信濃には村上義清
			やよい	みんな諏訪頼重と手を結んで、甲斐の武田が
	中高			攻め込むのを必死に防いでいたのさ。
	下高 F・O		や・雫 夏美	信濃をみんなで守っていたんだね。
	中平		武田 晴信	領主となった初めの一年は国造りに取り組んだ。
	田園 E・F		村人	(晴信を取り囲む甲斐の村人たち)
			武田 信繁	兄者、いえ、御屋形様、領民は心底喜んでくれましたなあ。
			武田 晴信	だが、信繁、戦国の世を生き抜くためには、
				川の氾濫を防ぎ、戦を休み、
				守りを固めるだけでは足らぬぞ。
			板垣 信方	食うか食われるか。
			甘利 虎康	天下取りへの道は、まず隣の国、信濃を攻め取り。
			馬場 信春	領土を広げる戦が肝心。
			武田 晴信	ならば、信濃の何処を攻め取るか。
	馬 S・E		4人	伊那(板垣)、木曾(甘利)、松本(馬場)、北信濃(晴信)。
			百足	御屋形様、諏訪頼重が甲斐の国に攻め込もうとして
				国境の富士見に陣を張りました。(平場上手より)
			板垣 信方	何。となると…、御屋形様がお若いだけに、
				この戦に負けたなら、甲斐の国の国人たちに侮られ、
				天下はおろか甲斐ですら一つに纏められなくなりますぞ。
				妹ごの禰々どのには相済まぬが、諏訪を攻め取りましょうぞ。
東光寺 ↓	中平 F・O		全	(うむ)
	中高一	諏訪 頼重	諏訪 頼重	(下手高台から上手高台へと…東光寺へ護送)
	上高	文字		天文11年(1542年)7月上原城(現・茅野市)、桑原城(現・諏訪市)
				降伏 東光寺へ護送
			晴信 重臣	(見守る)

			諏訪頼重	すわ たいしや かみ きよ たま はら たま まも 諏訪大社の神よ、清め給え、祓い給え、守りたまえ。
			M	イントロ入り、
			諏訪頼重	すわ ち すわ びと いやさか いやさか 諏訪の地よ、諏訪人たちよ、弥栄なれ、弥栄なれ・・・。
				(自害する)
			歌唱 舞踊2	おのずから 枯れ果てにけり 草の葉の
	上高 F・O			ぬし あ またも 結ばめ (頼重辞世)
	中高一 中平	禰々	禰々	(泣き崩れる) 兄上、酷うござりまする。
				ひとつと 和睦を 結びながら、その 相手を 攻め取り、
				追い詰めるとは・・・。
		頼隆 夫人	頼隆夫人白妙	ね ね どの なん ふびん うば うば こつにく あい は しゅら ば 禰々殿、何と不憫な・・・。奪い奪われ骨肉相食む修羅場が
				世の常と、義母はこの年ゆえに覚悟して参ったが、
				その若さで夫を失ったそなたに、掛ける言葉もありませぬ。
				頼重を失うた今、諏訪家の命綱・大祝のお役目も何処へ・・・
			禰々	ははうえ さま あに ふしまつ わ しやう 義母様、兄の不始末、お詫びの仕様もござりませぬ。
				甲斐の国で過ごした幼い日々、
				父上の理不尽な振る舞いに耐え、正しきことのみを
				ひたと見つめる、そんな兄上を、禰寝は腹違いの妹なれど、
				誇らしゅう思うておりました。
				こうして信濃に嫁ぎ、諏訪の暮らしにもようやく慣れて
				きた矢先でしたのに。
				頼重様を失うた今、禰々はもはや生きてゆかれませぬ。
				何時から兄上は父上そっくりになりましたのじゃ。
				血で血を洗う戦の世が、禰々はつくづく嫌になりました。
東光寺 ↑	中平 F・O			はや よりしげ さま そば ゆ すいじやく くずお 早く頼重様のお側に行きたい。(衰弱し、頹れる)
内部 館↓		文字		この年、天文11年(1542年)徳川家康生まれる
			第八景	山本勘助仕官そして諏訪御料人(諏訪姫) 躑躅が崎館へ
			出演	ただはるのぶ いたがきのぶかた やまもとかんすけ すわ ひめ ふたはしら かみ 武田晴信、板垣信方、山本勘助、諏訪姫、二柱の神
				おがさわら ながとき むらかみよしきよ 小笠原長時、村上義清

			文字	たけだ はるのぶ さい 武田晴信 23歳
			M	F・O
	中平		板垣信方	お やかたさま しかん ねが おとこ お 御屋形様、仕官を願っている男が居りましてな、是非とも
				お やかたさま めどお 御屋形様にお目通りをと。
			武田晴信	うむ。
			板垣信方	こちらへ参られよ。
			山本勘助	はっ。(あしをひきずり、頬には右目に迫る刀傷の男)
			山本勘助	やまもと かんすけ 山本勘助にござります。
			板垣信方	この者、なかなかの知恵者のようござりまする。
				ひとつ、お話を。さ、申して見よ。
			山本勘助	それがし駿府に生まれ、三河に養子に参りました。
				その後、中国、四国、九州、関東を10年の間 行脚し、
				城取や陣取りの悉くを学びましてござる。
			名前3人	あき くに せんごく だいまよう もうり もとなりどの 安岐の国の戦国大名、毛利元就殿、
				すほう くに おおうちよしたか どの 周防の国は大内義隆殿、
				するが いまがわ よしもと どの 駿河の今川義元殿ら、
				な い ぶしろう ちりやく はいけん まい 並み居る武将の知略、とくと拝見して参りました。
				なれど、この勘助の思いまするに、
				たけだ お やかたさま ぶゆう ちえ わか どなた 武田の御屋形様の武勇と知恵、その若さで何方にも
				けつ と 決してひけは取りませぬ。いえ、
			リスペクト	いずれは天下取りをなさるお方と、リスペクトしておりまする。
				* 価値を認め、敬意を払うこと
				ゆえ ぜひ たけだどの ほうこう さんじよう つかまつ それ故是非とも、武田殿にご奉公をと、参上仕りました。
			板垣信方	との それがし ねが いた 殿、某からもお願い致しとうござりまする。
				いや、なに、こやつ、妙に惹かれるところありましてな。
			武田晴信	して、手当はいかように望んで居る。
			山本勘助	ひやっかん じゅうぶん いくさ ば へたら かな 百貫にて十分でござりまする。戦場にて働くこと叶いますれば。
			武田晴信	き い にひやっかん と 気に入った、二百貫取らせるとしよう。

			山本 勘助	はは、有難き幸せに存じまする。
				以後、この勘助、身命を賭して殿にお仕え申しまする。
				つきましては、御屋形様、早速ではござりますが、
			板垣 信方	これこれ、図に乗ってそう先を急ぎなさるな。
			武田 晴信	よいよい、申して見よ。
			山本 勘助	他でもござりませぬ。昨年、滅ぼされた諏訪一族の件、 かねてより、気がかりでは。
			板垣 信方	そちは、何が言いたいのじゃ。
			山本 勘助	はっ。怖れながら、自害なされた諏訪頼重殿は、由緒ある 戦国大名であるばかりか、大切な諏訪大社を預かる 大祝(神官)のお家柄。
	上高		タブ ロー	諏訪 御料人 (侍女らと共に、上手高台に浮かび上がる、悲しげな後ろ姿)
			諏訪 姫	山本 勘助 あのお方が諏訪頼重殿の忘れ形見、諏訪姫にござる。
			小見氏	板垣 信方 ひめのはは、頼重殿の側室で、筑摩郡小見氏(麻績氏)の 豪族の娘御。
			雲	諏訪 御料人 (正面を向く)
			板垣 信方	諏訪姫は、まだ12、3歳ながら、 艶やかなること 世に類無しと聞き及んでおりまする。
			山本 勘助	この躑躅が崎館に、姫様をお迎えするがよろしかろうと。
			武田 晴信	何・・・諏訪姫に、父の敵のこのわしの側室になれと申すか。
			山本 勘助	諏訪姫と御屋形様との間に、お子が生まれれば、 諏訪家の家臣らは、お家再興の望みも叶い、諸手を挙げて、 御屋形様に心服致しましょう。すれば、諏訪支配は盤石。
			板垣 信方	流石、勘助。御屋形様に見込まれた男だけのことはある。
内部 館↑	中平 FD		山本 勘助	恐悦至極に存じまする。
	湖 E・F		諏訪 姫	父上も、母上も身罷ってしまった。 なぜじゃ、この姫を残して・・・父上一、母上一、姫は 毎日、諏訪の湖を眺めては泣き暮れておりまする。

				やがて冬が来て、私の流す涙が氷となったら、
				湖を渡って、黄泉の国の父上母上に会いに行きたい。
	下高	たけみやさか		その昔、下諏訪に行かれた八坂刀売神を慕って
	下高 F・O			湖の氷を渡ってゆかれた建御名方尊のように。
			M	イントロ入って「春待つ湖」(美咲蘭・作詞 角田忠雄・作曲)
	歌唱		歌唱 舞踊	湖の寄せては返すさざ波に
	歌唱 F・O			父母を恋い 春待つわが身
	中・上F・ O		晴信 信・勤	(歌終りで諏訪姫を迎えに行く。下の台詞と同時進行で)
	下高	小笠原 長時	小笠原 長時	武田晴信め、すっかり諏訪を手中に収め居って…
	湖 F・O	村上 義清	村上 義清	憎き奴よ。このままでは筑摩郡も北信濃も危ういぞ。
	下高 F・O		小笠原 長時	早速に手を打たねばなるまで。
			M	転換のM入ってB・G
		文字		その2年後、天文15年(1546年)
				諏訪姫・武田晴信(26歳) に 長子誕生 武田勝頼と命名
	雨 E・ F	文字		種子島に鉄砲が伝わり、後に武田家の命運を決することになる
	水 E・F			第九景 甲州法度
			出演	領民ら、武田晴信、百姓ふゆ、百姓 松三郎、百姓すぎな、百姓 初鹿野
				武田義信、武田信親、板垣信方、甘利虎康、馬場信春、原虎胤、山本勘助
				真田幸隆、春日源五郎、武田信繁
	田園の E・F	夕焼け 文字		天文16年(1547年) 御勅使川と釜無川の堤防工事が続く
	中平		領民	(かいがいしく立ち働く)
			百姓 初鹿野	おーい皆の衆、ご領主様が御見回りに来られたぞよう。
			武田 晴信	(声をかけ、激励し、労い回る)
	雨 F・O		百姓 ふゆ	ご領主様、おらたちや汗流して、食うや食わずで
				田畑開墾して、こんな狭いとこだけえども、ほんでも
		小鳥 S・E		せえいっぺえ苗植えて、稲育ててきたいね。
			百姓 松三郎	おい、やめろって。晴信様にや何の咎もねえだよ。
			百姓 ふゆ	だって父ちゃん、上つ方の衆にやあ、分かってもらわねえと。

				つゆ おおあめ ふ なが なが あめつづ なが 梅雨の大雨降りやあ流され秋の長雨続きやあ流され、
				へえ、せい こん も つ きちまうだよ。はんで、なん へえ、精も根も尽きちまうだよ。はんで、何とかしてくろっし。
				まえ りょうしゅ きま と き がまん ひこたろう 前のご領主様ん時や我慢してたが、おらとこの彦太郎も
				そう じ ろう わけ みそら さく いくさ つ 惣二郎も若え身空で、佐久の戦に連れていかれて
				それつきり… いくさ かげん それつきり…戦もええ加減にしてくろっし。
		百姓 松三郎		へえ、わ へえ、分かってくれなかつたずらで、そんぐれえにしとけや。
		百姓 すぎな		そうだよお、おふゆさのい いなさる通りだ。
				おらうちのとうごろう すわ いくさ からたいた けえ き おらうちの藤五郎は諏訪の戦から体傷めて帰って来て、
				ねこ 寝込んだまんま、くうもんなくて死んじまったよう。
		百姓 ふゆ		こんど いくさ と 今度戦でとうちゃん取られたら、おらんとこは踏んだり蹴ったり
				ちゃんと生きて帰しとくれっし。たの ちゃんと生きて帰しとくれっし。頼むにい。
		武田 晴信		いね ゆた みの たはた りょうみん く ていぼう こうじ 稲が豊かに実る田畑と、領民の暮らしは、この堤防工事に
				かか お ひと がんば たの 掛って居る、もう一頑張り、頼んだぞ。
		百姓 初鹿野		りょうしゅ きま ご領主様、ありがとうございます。
		百姓 松三郎		き つ けえ きい付けて帰れし。
		百姓 すぎな		また、こうし。
		武田 義信	武田 義信	(9歳)お父上、義信も信親と共に堤の工事の手伝いを
				しとうございます。のぶちか だいじょうぶ みず しとうございます。信親、大丈夫か、そっちは水かさが増して
				なが はや ゆえ あが そら あに て と 流れが速い故危ないぞ。そら、兄が手を取ってやろう。
		武田 信親	武田 信親	(6歳)兄上、ありがとうございます。でも、耳をすませば、
				のぶちか みず なが ひと けはい 信親は水の流れも人の気配もみなわかります。
				あ、いま だれ かし すべ あ、今、誰かが足を滑らせた、おや、あちらでは
				あしば かた ひと かにうえ 足場を固めている人が。そうでしょう、兄上。
		武田 義信		のぶちか なん わか め み 信親は何でも分るんだなあ。まるで目が見えているようじゃ。
		武田 信親		たとえ りょう め み かい やまやま ふ お かげ たとえ両の目は見えなくても、甲斐の山々を吹き下ろす風も
				そら ゆ くも こころ まなこ み ちちうえ ははうえ 空行く雲も、心の眼で見ると、父上母上から
				おし いつも教えられております。
		武田 晴信		あす のぶちか ぶつもん はい きょう ぞんぶん 明日からは、信親は仏門に入る。今日は存分に

				兄と遊ぶが良いぞ。
	中平 F・O		領民	(ひとしきり働き、去る)
内部 館↓	水 F・O		M	F・O
	中平		重臣ら	(そこはすでに、躑躅が崎館である)
			武田 晴信	皆の者の尊い働きにより、甲斐の国も僅かずつではあるが 土台が固められ、愈々戦に打って出る時が到来した。 そこで、武田家家臣と領民とが守る掟を定めたい。
			甲州	題して、「甲州法度之次第」(信玄家法)じゃ。 (重臣らに命ずる)
			板垣 信方	領国全体は武田家の領有管理とする。
			甘利 虎康	国人・地侍は理由なく農民の田畑を取り上げてはならぬ。
			馬場 信春	年貢の滞納は認めぬ。
			武田 信繁	他国への勝手な書状はこれを禁止する。
			山本 勘助	喧嘩両成敗。
			板垣 信方	公私混同を避けよ。
			甘利 虎康	刀・鎧は常に手入れ怠らず、戦の備えをせよ。
			馬場 信春	この定めに従わぬもの有らば、身分の上下を問わず 何人たりとも許さぬ。
			武田 晴信	国づくりの基は、己の都合ではなく、公明正大な法を 定めて、それを皆が守ること。領主とて例外ではない。
			原 虎胤	御屋形様、鬼美濃と呼ばれる、この原虎胤、信虎公 追放を信濃の国で聞き及んだ折は、取って返し、 板垣殿、甘利殿に食って掛かったものじゃが、 今の御屋形様のお姿を見て、胸の痞えが下りましたわ。
			山本 勘助	御屋形様、あれに控えております男、是非とも 武田家家臣に加えて頂きとうござりまする。
			武田 晴信	うむ、目通りを許す。
			真田 幸隆	(前に進み出て平伏する)

			板垣 信方	おもて あ 面を挙げられよ。
		真田 幸隆	真田 幸隆	はは一つ。
				それがし しなの くに ちいさがたごおり ごうぞく うんの で 某は、信濃の国小県郡の豪族・海野の出で、
				さなだ げんた ざ えもん ゆきたか 真田源太左衛門幸隆にござりまする。
				かすらお じょう むらかみ よしきよ やぶ かんとう かんれい うえすぎ のりまさ どの 葛尾城の村上義清に敗れ、関東管領・上杉憲政殿の
				ひご こうづけ ほうめい 庇護により、上野に亡命しておりましたが、
				こたびは やまもと かんすけどの くちまき さなだ け こたびは山本勘助殿のお口利きにより、真田家は
				いちぞく あ つか いた ねが で 一族を挙げてお仕え致したく、願い出ましてござりまする。
		山本 勘助		こうづけ ち り あか さなだどの お やかたさま やく 上野の地の利に明るい真田殿、きっと御屋形様のお役に
				た みこ すいきよ いた しだい 立つと見込んで推挙致した次第。
		板垣 信方		お やかたさま ひとり こころづよ みかた ふ 御屋形様、また一人、心強い味方が増えましたなあ。
				つづ いさわ ひやくしやう かすが げんごろう まえ で 続きまして、石和の百姓、春日源五郎、前に出よ。
	春日 源五郎	春日 源五郎		ははっ。 おおびやくしやう かすが け ようし むか ざり あに ははっ。大百姓の春日家に養子に迎えられた義理の兄との
				あとめ あらし やぶ ゆ あ な むいちもん 跡目争いに敗れ、行く当て無しが無一文で
				きやうり いさわ お じっか でんばた みれん 郷里の石和を追われました。実家の田畑にに未練はござらぬ。
				ざいさん なに も きらく み うえ 財産も何も持たぬ気楽な身の上、
				つか はし もの ほこ こびと かご かつ なん 使い走りや物運びの、お小人でも籠担ぎでも、何でも
				せい いっばい よろこ いた もう つ 精一杯喜んで致します。お申し付けください。
		武田 晴信		そち きんじゆう め かか 帥を、近習に召し抱える。
			春日 源五郎	ありがた しあわ ぞん のち こうさか だんじゆう 有難き幸せに存じまする。(後の高坂弾正)
		板垣 信方		それではここで、今一度、皆の者に確認しておきたい。
		甘利 虎康		お やかたさま ほか せんごく だいみゆう ちが しろ つく 御屋形様は、他の戦国大名と違い、城を作ることをなされぬ。
			武田 信繁	なぜならば、
	人は城			ひと しろ ひと いしがき ひと ほり 人は城 人は石垣 人は堀
	家臣 ら			ひと しろ ひと いしがき ひと ほり 人は城 人は石垣 人は堀
	情けは	武田 信繁		な な みかた あだ てき 情けは味方 仇は敵なり
	家臣 ら			な な みかた あだ てき 情けは味方 仇は敵なり
		武田 信繁		その意味は

			馬場 信春	りょうしゅ なさ ぶか まこと かたむ ひと む 領主たるもの、情け深く真実を傾けて人に向かえば、
				かなら おも つた みかた え 必ずやその思いは伝わり、味方を得ることができる。
			原 虎胤	ひと ただ ひよか ちから もち 人を正しく評価してその、力量にふさわしく用いれば、
				しんらい むす まこと くに づく 信頼に結ばれた真の国造りができる。
			全	ひと しろ ひと いしがき ひと ほり 人は城 人は石垣 人は堀
				なさ みかた あだ てき 情けは味方 仇は敵なり
				なさ みかた あだ てき 情けは味方 仇は敵なり
			甘利 虎康	また、そんし へいほう の お すなわ また、孫子の兵法では、こうも述べて居る。即ち、
				そんたく つな お もの へいき みかた うらぎ 損得で繋がって居る者は、平気で味方を裏切るが、
				てんめい しんらい あ もの くらん とし たす あ 天命によって信頼し合う者は、苦難の時にこそ助け合う。
			板垣 信方	お やかたさま なにとぞ しんぎ あつ まつりごと もつ かい くに りょうみん 御屋形様、何卒、信義に厚い政を以て、甲斐の国を、領民を、
				まも む くだ ふ ねが もう 守り抜いて下され。伏してお願い申しまする。
内部 館↑	中平 F・O		全	ねが もう お願い申しまする。
	戦場 E・F		第十景 塩尻峠(勝弦峠)の合戦	
			出演	こゆき きみどり なでしこ きさざき ききょう おがさわら ながとき むらかみよしよ たけだ はるのぶ 小雪、卓緑、撫子、つくし、如月、桔梗 小笠原長時、村上義清、武田晴信
				さんじょうふじん じじょ こ おおい ふじん いたがきのぶかた あまり とらやす おだ のぶなが 三条夫人、侍女ら、子ら、大井夫人、板垣信方、甘利虎康、織田信長
	下高一 前中平		小雪	さー、こうして勢いに乗った武田晴信は 七千の軍勢を率いて信濃の国へと出陣。
			撫子	諏訪を通り、小県郡は葛尾城の、村上義清を攻めた。
			つくし	だが、この戦で、晴信も深い傷を負い、ばかりか
	上高	板垣		ちち あお たよ じゅうしん いたがき のぶかた さい せんし 父とも仰ぎ頼りにしてきた重臣・板垣信方(59歳)が戦死。
	下高	甘利	早緑	つづ あまり とら やす さい 続いて甘利虎康(50歳)までもが討死した。
	上下高 F・O		4人	これが世にいう、上田原の戦いなさ。
			文字	てんぶん ねん ねん つき うえだはら たたか たけだ ぜいたいはい 天文17年(1548年)2月 上田原の戦い 武田勢大敗
			桔梗	そこで「武田を信濃から追い出すのは今を置いて他にない」
	風雲 E・F			とばかり、その二月後、
	上高	軍馬 S・E	小笠原 村上	しなの くに ふかし はやしじょう じょうしゅ おがさわら ながとき むらかみ よしよ 信濃の国は深志の林 城城主・小笠原長時は、村上義清らと、
	上高 F・O			すわ じんじや しもじや せんりょう 組んで諏訪神社下社を占領。

			小・な さ・つ	ごせん へい ひき しおじり かつつるとうげ じん し 五千の兵を率いて、塩尻は勝弦峠に陣を敷いた。
	中奥 F・D		小雪	そうなると、今度は武田勢も負けてはいない。
	前平			あさ かしゅう さくせん おがさわら くん ね こ おそ あっしゅう 朝がたの奇襲作戦で小笠原軍の寝込みを襲い、圧勝。
			文字	てんぶん ねん ねん がつ しおじりとうげ たたか かつつるとうげ たたか 天文17年(1548年)7月 塩尻峠の戦い(勝弦峠の戦い)
			村人	なきから かつ つ ていねい ほうむ (亡骸を片付け、丁寧に葬る)
	上高 F・O		撫子	ほうしゅうきん めあ くび と どうたい なきから 報奨金目当てに首を取られた、胴体だけの亡骸が
				いっせん たい いきさげ ころ 壹千体、戦場に転がって居たそうな。
			桔梗	そこで、哀れに思った柿沢の村人たちは
				なきから あつ ていねい ほうむ 亡骸を集めて丁寧に葬ってやった。
			如月	かきざわ くびづか どうづか た 柿沢の首塚胴塚はこうして建てられたってわけ。
			桔梗	やぶ おがさわら えちご うえずぎ たす もと 敗れた小笠原は、越後の上杉に助けを求め、
				しなの さ い 信濃を去って行った。
	下高		小笠原 村上	むらかみ よしきよ おがさわら ながとき かみて たかだい しもて たかだい (村上義清、小笠原長時は上手高台から下手高台へ)
			小雪	いきお の たけだ はるのぶ ふかし しまうち ひらせ じょう 勢いに乗った武田晴信は、深志島内の平瀬城、
				ほたか こいわ だけじょう つぎつぎ しゆちゆう おさ 穂高の小岩嶽城・と次々に手中に収め
	前平 F・O			きたしなの む 行くて ま えちご ながお かげら 北信濃に向かった。行く手に待つは越後の、長尾景虎。
			長尾 景虎	たけだ はるのぶ いきさ たいぎ のつ たたか じつ ちち ついほう 武田晴信、戦とは大義に則って戦うべし。実の父を追放し、
	下高 F・O			かい くに わ もの うえ なに のぞ 甲斐の国を我が物にして、その上に何を望む。
内部 館↓	戦場 F・O		文字	はるのぶ はは おおい ふじん ぼつ きょうねん さい 晴信の母、大井夫人 歿 享年55歳
	風雲 F・O			かつより はは すわ ひめ ぼつ きょうねん さい 勝頼の母、諏訪姫 歿 享年26歳
	中平		晴信 勘・繁	やまもと かんすけ たけだ のぶしげ わき ひか (山本勘助、武田信繁が脇に控える。)
			武田 晴信	たま せき いたがき のぶかた あまりとらす はるのぶ たす (偶に咳をしながら)板垣信方、甘利虎康、この晴信を助け
				なに 何かにつけてあるべき道を教えてくれた譜代家老の二人を
				うしな はほうえ まで よ さ られた わし て いま きり なか 失い、母上迄もが世を去られた。儂のゆく手は今、霧の中じゃ。
	上高		三条 子ら	おおい ふじん ていまい さんじょう ふじん じよ こ う あ (大井夫人、弟妹、三条夫人、侍女、子ら 浮かび上がる)
			武田 晴信	はな め みな うた おど がくもん う こ たの 花を愛で、皆と歌い踊り、学問に打ち込んだ、あの、楽しく
				あか ひ ふ そそ ひび いずこ き せき 明るい日の降り注ぐような日々は、何処に去ったのか。(咳)
				たいしやう 大将たる者、そのようなことを言っではおられぬ。

	中平 F・D				まえむ 向かって すすむ だけが、のこ された 道 じゃ。
	象徴的 (幻影)	SE 声	大井 夫人		はるのぶ か いくさ おご ことの な きよう、いず 住まいを 改める のですよ。
					いたがきどの あまり どの 板垣殿も 甘利殿も、そなたに 国主の 何たるかを 身をもって
					さと 諭そうと、いのち か いくさば ぼろ ゆ 命を懸けて 戦場で 滅んで 行きな させた のじゃ。
		SE 声	板垣 信方		お やかたさま か 御屋形様、勝ち すぎて は なりませぬ。ぼろ もと 滅びの 元 になります からな。
		SE 声	甘利 虎康		お やかたさま いくさ いくさ あ く たみ こま は 御屋形様、戦 戦の 明け暮れに 民は 困り果て て おりますぞ。
			大井 夫人		そなたの ちち のぶとらどの に 舞い ならぬ よう 心して 国を 治められよ。
	幻影 F・O				ひと ち におい の する 所に、やす らかに 集う ことは できぬ のじゃ。
			武田 晴信		(がっくりと 膝をつく) 儂は この 先、何処に 向かって 進めば よいのだ。
	中平 F・UP				いってん つつじ きき やかた いなら ふしろう (一転して 躑躅が 崎館 居並ぶ 武將ら)
			武田 晴信		(ずきん 頭巾をかぶせる)
			武田 晴信		きょう たけだ はるのぶ しゅつけ いた ほうみょう たけだ しんげん 今日より 武田晴信は 出家致した。法名は 武田信玄。
					M ギターブリッジ
		文字			たけだ しんげん さい 武田信玄 39歳
					たけだし いまがわし ほうじょうし さんごく どうめい てんぶん ねん ねん 武田氏・今川氏・北条氏 三国同盟 天文23年(1554年)
			武田 晴信		いさわ ひやくしよう かすが げんごろう はたら ひと 石和の 百姓、春日源五郎、そちの 働きを 認め、
	中平 F・O		高坂 弾正		きょう さむらい だいしよう めい な こうさか だんじょう あらた 今日より 侍 大将を 命ずる。名を 高坂弾正と 改めよ。
					(のちに 甲州流 軍学書「甲陽軍鑑」を 著す。これにより、
					こうしゅうりゅうぐん がく えど ぼくふ ひら とくがわ いえやす しん 甲州流 軍学は 江戸幕府を開く 徳川家康の 指針となる。)
	上手 高 台		織田 信長	織田 信長	さい なに いまがわ よしもと おわり む (26歳) 何、今川義元が 尾張へ 向かった と な。
					うん てん にあり。よわごし にんげん てき つね たいぐん み 運は 天にあり。弱腰の 人間には 敵は 常に 大軍と 見えよう。
					よいか、この 戦が 勝負どころ じゃ。おのおの かって こうみょう あらそ よいか、この 戦が 勝負どころ じゃ。各々 勝手な 功名争いを
	上高 F・O	馬 S・E			や いか とき そしき わす しゅうだん たたか よ 止め、如何なる 時も 組織を 忘れず 集団で 戦え。良い 一。
	中平			百足1	との いちだいし 殿一、一大事 できざり ます一。(下手 平場より)
				第十一 景	決戦川中島
				出演	むかで たけだ はるのぶ やまもとかんすけ たけだ のぶしげ たけだ のぶかど こうさかだんじょう ばば のぶはる 百足 1・2、武田晴信、山本勘助、武田信繁、武田信廉、高坂弾正、馬場信春
					ほらがい たて ききょう うえすぎけんしん やまもとかんすけ 法螺貝、殺陣、桔梗、上杉謙信、山本勘助、
				百足1	すんぶ いまがわ よしもとどの おだ のぶなが ぐんぜい う 駿府の 今川義元殿が、織田信長の 軍勢に 撃たれ まして ござる一。

			武田晴信	なに いまがわどの 何、今川殿が。
			百足2	はっ、今川義元殿は二万五千の大軍を引きつれ、尾張攻略に
				起ち上がられました。その先に待つは京の都。
				天下取りをもくろむ覚悟の出兵でござりました。
			百足1	迎え撃つ織田信長は僅か二千。
				負ける筈の無い戦でござりましたが、土砂降りの雨に降られ、
				敵の近づく足音も聞こえぬまま、
				桶狭間で休息をとっておいでの隙を突かれて、無念の死を。
		今川歿	百足2	永禄3年(1560年)5月19日、明け方のことござりまする。
			武田晴信	今川義元殿、織田信長を新参者と侮り、油断召されたな。
			山本勘助	御屋形様、義元殿が亡くなられた今、わが武田の上洛を
				阻む者はありませぬ。駿府は御屋形様の所領になったも同然。
				この上は、海に舟を、水軍を持たれては如何かと。
		文字		53隻の軍船を持つ武田水軍誕生、武田氏滅亡後は徳川家康に吸収される。
			武田晴信	義信、今川殿は帥の奥方の父上じゃ、懇ろに慰めるがよい。
風林火山旗→				皆の者、ついては、北信濃攻略を開始せねばなるまい。
		典厩逍遙		そこで、合戦旗を新たに定めようと思う。典厩信繁。
				逍遙軒信廉。
			信繁信廉	は。御屋形様、これに(と、風林火山の旗を掲げる)
			高坂弾正	疾きこと風の如く、徐かなること林の如く
				侵掠すること火の如く、動かざること山の如し
				「疾如風、徐如林、侵掠如火、不動如山」孫子の旗1561年作成
			武田信繁	恵林寺の快川和尚に書いて頂いた。
			武田晴信	孫子の兵法の言葉じゃ。(咳)
				戦とは、敵を欺き、分散と集合を繰り返し、変化してゆく物。
				であるが故に、これを皆の者の旗印としたい。
		全		疾きこと風の如く、徐かなること林の如く
				侵掠すること火の如く、動かざること山の如し

風林火山旗一	中平 F・O		武田 信廉	われ ^{たけだ} 我ら武田のエンブレムですな一。
内部館 ↑			M	がっせん ^{あらわ} 合戦を表し、B・G
陣幕↓	法螺貝	軍馬 S・E	法螺貝	(ほらい ^{なひび} 法螺貝鳴り響く)
武田 旗↓	中平		殺陣	ぐんだん ^{ぶたい おく あらわ こうしん} (軍団が舞台奥から現れて、行進する)
	上平		三条 夫人	おと ^き 音に聞こえた騎馬軍団に加え、風林火山の旗印の元、 きた ^{しなの こうりやく めざ しんげん どの ひき たけだ ぜい いちろ} 北信濃攻略を目指し、信玄殿率いる武田勢は一路
上杉 旗↓				かわなかじま ^{へい すず} 川中島へと兵を進めました。 すわ ^{ひめ あいだ う しんげん どの なん たけだ しろう かつより} 諏訪姫との間に生まれた信玄殿の4男、武田四郎勝頼も ういじん ^は 初陣を果たしたのでござりまする。こうして、 だい ^{よん かい かわなかじま けつせん ひ} 第四回川中島の決戦の火ぶたが切って落とされました。
	霧 E・F		武田 信玄	かかれ一！(軍団は下手に入る)
	下高		上杉 謙信	おか ^{しんげん じんえい} 可笑しい。信玄の陣営からしきりに立ち上るあの竈の煙…。 あれ ^{ほど たいぐん た} あれ程の大軍に食べさせる握り飯を今頃に…。 そうか、たけだ ^{ぜい こんや はん わ じんえい せ こ} そうか、武田勢は、今夜半にも我が陣営に攻め込もうと い ^{さくせん みな もの きり かく いま ちくまがわ わた} 言う作戦か。皆の者、霧に隠れて今すぐ千曲川を渡り たけだ ^{じんえい しの よ} 武田の陣営に忍び寄るのじゃ。
	中平 F・O	軍馬 F・O		
	中平 上高		山本 勘助	しまった。 かわなかじま ^{しんど けんしん さいじよ ざん のぼ} 川中島に陣取った謙信を妻女山に上った別働隊と かいづ ^{じょう ぐん とで はさ う ち} 海津城のわが軍とで挟み撃ちにと言う某の作戦、 きつつき ^{せんぼう よ} 啄木鳥戦法が、読まれたか。上杉謙信め、恐るべき奴。 ぎょりん ^{じん いそ かくよく じん き か} 魚鱗の陣を、急ぎ鶴翼の陣に切り替えて守りを固めよ。
		馬 S・E	魚鱗 鶴翼	武田 晴信
				百足 1
				もう ^あ 申し上げます一。 ただいま ^{たけだ のぶしげさま お やかたさま せま てき} 只今、武田信繁様、御屋形様に迫りくる敵を一手に ひ ^う 引き受けて奮戦し、討死なされました。
			武田 晴信	のぶしげ ^{のぶしげ そち} 信繁が…信繁、帥はいついかなる時も儂を守り つ ^{したが} 付き従ってくれた。帥の信、決して忘れまいぞ。
			山本 勘助	のぶしげ ^{どの し} 信繁殿を死なせてしまったのは、いつしやう ^{ふかく} 一生の不覚。
			殺陣	かくなる ^{うえ} 上は…。(他の敵を引き離して戦う)

	上高 F・O			お やかたさま 一。(たおれる) 京の都へ…。
			上杉 謙信	たけだ しんげん かくご 武田信玄、覚悟—。
			殺陣	しんげん けんしん いっき う (信玄、謙信一騎打ち)(やがて謙信去る)
上杉旗 ↑	中平 F・O		家臣	やかたさま との お屋形様、殿…。
武田旗 ↑		文字		えいろく ねん ねん つき たけだ のぶしげ かわなかじま うちじに きょうねん さい 永禄4年(1561年)9月 武田信繁 川中島にて討死 享年37歳
内部 館↓	霧 F・O	文字		ぐんし やまもと かんすけ かわなかじま うちじに きょうねん さい 軍師・山本勘助 川中島にて討死 享年68歳
第十二景 義信謀反				
			出演	やよい、なつみ しずく きさらぎ はらとらたね ばば のぶはる たけだ のぶかど たけだ よしのぶ 夏美、雫、如月 原虎胤、馬場信春、武田信廉、武田義信、
				おぶ とら まき たけだ しんげん やまがたまさかげ きんじょうふじん がつしょう 飯富虎督、武田信玄、山県昌景、三条夫人、合唱
			M	F・O
	上高		やよい	この年、信玄は織田信長と手を結んだ。
		文字		のぶなが ようじょう しろう かつより つま むか 信長の養女を、四郎勝頼の妻として迎えたのさ。
			雫	そればかりじゃあない。信玄の六女・松姫を信長の嫡男に 嫁がせたのさ。
			夏美	それから信玄は、徳川家康とも同盟を結んだ。
			如月	いまがわ よしもと おだ のぶなが う と いま 今川義元が織田信長に討ち取られた今、
				するが とおとうみ みだ みだ のぶなが いえやす ねら 駿河も遠江も乱れに乱れ、信長や家康に狙われている。
			雫	信玄は、今川の領土を我が物にするのは、今しかないと 考えたってわけだね。
			やよい	そういうこと。
	上高 F・O			さっそく たけだけ ぐんぎ ようす み 早速、武田家の軍議の様子を、見てみようじゃないか。
	中平	原 虎胤	原 虎胤	いまがわ りょう こうりやく た あ 今川領攻略に起ち上がりましょうぞ。
			馬場 信春	それがし せ いてつ かんよう おも 某も、攻めの一手が肝要と思われまます。
		武田 信廉	武田 信廉	お やかたさま いまがわ む うみ うみ 御屋形様、今川の向こうには、海があります。海さえあれば、
				しお さかな ぶつし ゆそう おも て はい 塩も魚も、物資の輸送も、思いのままに手に入ります。
				うみ そ わ かい くに な もの 海こそ、我が甲斐の国にとって無くてならぬ物。
			馬場 信春	きょう みやこ いてつ ちか 京の都が、また一步近づきます。
				しなの せいふく えちご こうりやく 信濃の征服と、越後攻略はさておき、

				てんか と 天下を取るには、まず今川を攻め落とさねばなりませんまい。
		原 虎胤	おだ とくがわ どうめい 織田・徳川は、同盟によりひとまず抑え込んでござる。	
		武田 信玄	うむ よしもとどの ちやくなん うじざねどの うむ、義元殿の嫡男、氏真殿では、駿河の行く末は危うい。	
			となれば、駿河攻略は必定。皆の者、意義あるまいな。	
		武田 義信	ちちうえ ことば 父上、お言葉ではござりますが、某は納得できませんぬ。	
			それがし つま な いまがわ よしもとどの むすめ 某の妻は、亡き今川義元殿の娘。	
			たす たす 助け、助けられ、今日まで、同盟により守られてきたのは、	
			いまがわどの かた きずな 今川殿との固い絆あったればこそ。	
			ひと として い きる なに より 大切な物は、信義を重んずることじゃと、	
			ちちうえ つねづね い 父上は常々言うておられたではありませぬか。	
			どうか 御考え直しを。	
		飯富 虎昌	お やかたさま それがし ねが もう あ ひりき 御屋形様、某からもお願い申し上げます。非力ながら某、	
			ちやくなん よしのぶ きさま もり やく お やかたさま おお ご嫡男、義信様の傳役を、御屋形様より仰せつかり、	
			たいへん めいよ きも めい そぼ はな こんいち みまも 大変な名誉と肝に銘じ、お側を離れず、今日まで見守り	
			つづ けて まい よしのぶ きさま せいぎ ひとすじ けししょう 続けて参りました。義信様の正義一筋のご気性は、	
			ち ち あら せんごく よ 血で血を洗う戦国の世にあって、さながら	
			かい そら なが はくろん ごと すがすが 甲斐の空に流れる、白雲の如き清々しさ。	
			そしてそれは、とりもなおさず御屋形様ご自身から	
			う 受け継がれたものでござりましょう。	
			なにとぞ なにとぞ かんが なお くだ ねが たてまつ 何卒、何卒お考え直し下されたく、願いあげ奉りまする。	
		馬場 信春	おぶ ひょうぶ とら まさどの かい くに よしのぶどの たちば 飯富兵部虎昌殿、甲斐の国は義信殿のお立場だけで	
			はか 計れるものではない。多くの民百姓、家臣の先行きを	
			あん 案ずるが故に、御屋形様は・・・	
		武田 義信	ちちうえ わ つま ちち いまがわ よしもとどの かたき う 父上、どうか、我が妻の父、今川義元殿の敵を討つためにも、	
			おだ のぶなが う ほろ くだ 織田信長を打ち滅ぼして下さりませ。	
			そうして我らは、信濃攻略を確たるものに・・・	
		武田 信玄	もう よい。今日の軍議はこれまで。	
			よしのぶ たけだ なに だいじ いま いちど かんが 義信、武田にとり何が大事か今一度よく考えてみることにじゃ。	

				(しも て たかだい いどう) (下手高台へ移動)
東光寺 ↓		SE 声	山県 昌景	もう あ お やかたさま ちやくなん よしのぶ きま 申し上げます。御屋形様、ご嫡男、義信様が
				わ あに おぶ とら まさ むす むほん お 我が兄、飯富虎昌と結んで、謀反を起こしてござりまする。
				まことにまことに無念ながら、昨夜の密議が発覚致しました。
			文字	しんげん ちやくなん たけだ よしのぶ どうこうじ ゆうへい 信玄の嫡男・武田義信 東光寺に幽閉
	上平		飯富 虎昌	お やかたさま よしのぶ きま つら むね うち りかい たまわ 御屋形様、義信様のお辛い胸の内、ご理解賜りますよう。
				わ おとうと まさ かげ まつた つみ 我が弟、昌景に全く罪はござりませぬ。
				なにぞ おぶけ だんぜつ まぬか かくべつ はいりよ 何卒、飯富家断絶だけは免れますよう、格別のご配慮を。
				(せつぷく 切腹する)
			武田 信玄	おぶ とら まさ つみ しやうよう 飯富虎昌、すべての罪をかぶって、従容として
				し せき 死んでいったか。(咳)
				おとうと のぶしげ やまもと かんすけ つ そち うしな 弟・信繁、山本勘助に次いで、帥を失うとは、
				しんげん いっしやう ふかく 信玄、一生の不覚。
				おも じつちやく けつべき よしのぶ き もつ みちび 思えば、実直・潔癖な義信を義を以て導くことの
				でき いた なさ かえ がえ く 出来なかった我が至らなさ。返す返す悔やまれてならぬ。
				よしのぶ ふぎ しんげん つみ たけだけ そんぞく 義信の不義は、この信玄の罪。武田家存続のために
				うえ そち ひとり せお むほん かど この上は、帥一人が背負ってくれた謀反の廉、
				やみ ほうむ ちやくなん よしのぶ すく とら まさ ゆる 間に葬って、嫡男・義信を救おうぞ。虎昌、許せよ。
	上高		武田 義信	ちちうえ ははうえ きやう みやこ むか にん こ 父上、母上を京の都から迎え、5人の子をなしながら、
				すわ ひめ あぶらかわ ふじん つぎつぎ そくしつ お 諏訪姫、油川夫人と次々に側室を置くなど、
				ははうえ おも ちちうえ まごころ いずこ あ 母上を思う父上の真心は何処に在りましようや。
				よしのぶ ははうえ なぐさ め み おとうと りゆうほう まも 義信は、母上をお慰めし、目の見えぬ弟・竜芳を守り、
				しんぎ たつと い かた つらぬ おも 信義を尊ぶ生き方を貫くことだけを思っておりますが、
				して つみ つみ み いきぎよ たびだ 仕出かした罪は罪。この身は潔く旅立ちまする。
				らいせ め か ひとこと よしのぶ 来世でお目に掛かれたならば、一言、義信よくやったと
	上高 F・O			なさ ことば たまわ ぞん ちちうえ じがい 情けあるお言葉を賜りとう存じまする。さらば父上。(自害する)
東光寺 ↑			M	ギターブリッジ
			文字	たけだ よしのぶ ぼつ えいろく ねん ねん きやうねん さい しんげん さい 武田義信 歿 永禄10年(1567年)享年29歳 信玄47歳

	下高		武田 信玄	よしのぶ 義信一。
内部館 ↑	下高 F・O		三条 夫人	よしのぶ よしのぶ なぜ なぜ みずか いのち はは か 義信、義信一。何故、何故自ら命を。この母が代わりたかった。
しとみ 行灯・ふ とん	雲 E・F	夕焼け 空	M	イントロ入り、B・G
			合唱	ひと うまれ あい たたか 人は生まれ 愛し 戦い
				やがて かなた さ やがて 彼方へ去りゆく
				ゆ く 暮れ きず あらの きまよ 行き暮れて傷つき 荒野を彷徨いながら
				みあ しる くもなが 見上げれば 白き雲流れ
				われ 我をいざなう
				ああ いと ひと ああ 愛しき人よ
				いつの日か あの空の涯にて
				ゆめ むす 夢を結ぶとき
				かた あ ひと よ かな 語り合おう 人の世の哀しさを
				そして とも ほほえ そして 共に 微笑みかわそう
			第十三 景	椿散る 三条夫人の旅立ち
内部館 ↓	雲 F・O		出演	じじょ くちなし じじょ ひなの ききょう さんじょうふじん りゅうほう たけだ しんげん 侍女・梶子、侍女・鄙乃、桔梗、三条夫人、竜芳、武田信玄
	上高		御裏方 皆	あつ しんげい (集まり、心配げに)
			梶子	おくがたさま きぶん 奥方様、ご気分はいかがでございますか。
			三条 夫人	ありがとう、梶子。
			鄙乃	ひめさま きょう あおぞら す にゅうどうぐも ききょう 姫様、今日は青空が澄みわたり、入道雲が。さ、桔梗。
			桔梗	これは ゆき した す の 摺りおろしてござりまする。匂いは強う
	中高			ござりますが、お飲みになれば はや ねつ さ ござりますが、お飲みになれば早く熱が下がります。
			竜芳	ははうえさま りゅうほう まい かげん 母上様、竜芳が参りました。お加減いかばかりかと。
			三条 夫人	りゅうほう はい 竜芳、お入りなされ。
			竜芳	そこもとは・・・
			桔梗	ききょう もう 桔梗と申しまする。
			竜芳	さぞ辛い目に遭て来られたのじゃな。気の毒に。(手で制して)
				わし ひと いた くる わ みほとけ かご 儂には人の痛み苦しみが分かるのじゃ。御仏のご加護でな。

				ああ、血なまぐさい世の中と違 ^{ちが} うて、此 ^こ 処 ^こ は花園 ^{はなその} のようじゃ。
				母上 ^{ははうえ} の放 ^{はな} たれる香 ^{かお} りなのじゃな。
				日 ^ひ の光 ^{ひかり} が射 ^さ しこみ、皆 ^{みな} が仲 ^{なか} 良 ^よ く平 ^{へい} 安 ^{あん} に集 ^{つど} い、御 ^み 仏 ^{ほとけ} のおわす
				極 ^{ごく} 楽 ^{らく} とは、このよう ^と な所 ^{ところ} なのでござりましような。
	下高		桔梗 ^{さいぜん} (最 ^{さい} 前 ^{ぜん} から涙 ^{なみだ} していたが)(タブロー 幼 ^{よう} 女 ^{じよ} ゆき)	
				幼 ^{おきな} い童 ^{わらべ} の頃 ^{ころ} に、応 ^{おう} 仁 ^{にん} の乱 ^{らん} で家 ^{いえ} を焼 ^や かれ父 ^{ちち} 母 ^{はは} とも離 ^{はな} れ離 ^{はな} れ…。
				盗 ^{とう} 賊 ^{ぞく} の一 ^{いち} 味 ^み にさらわれ、戦 ^{いくさ} 場 ^ば の死 ^し 人 ^{びと} から着 ^{まも} 物 ^{もの} をはぎ取 ^と っては
	下高 F・O			売 ^う り飛 ^と ばす引 ^ひ き剥 ^は ぎを生 ^{なり} 業 ^{わい} に生 ^い きてきました。
				戦 ^{いくさ} のにおい ^{さそ} に誘 ^{なが} われ流 ^{なが} れ流 ^{なが} れて甲 ^{かい} 斐 ^ひ の国 ^{くに} に辿 ^{たど} り着 ^つ き、
				古 ^こ 府 ^{ふちゆう} 中 ^{ちゆう} で優 ^{やさ} しい夫 ^{おつと} に出 ^{であ} 会い、貧 ^{まず} しいながらも幸 ^{しあわ} せな暮 ^く らしを。
				所 ^{ところ} が、戦 ^{いくさ} に駆 ^か り出 ^だ されたきり、夫 ^{おつと} は帰 ^{かえ} ってきませんでした。
				信 ^{のぶ} 虎 ^{とら} 公 ^{こう} を夫 ^{おつと} の敵 ^{かたき} とつけ狙 ^{ねら} い、素 ^す 性 ^{じよう} を偽 ^{いつわ} ってこの御 ^お 裏 ^{うらかた} 方 ^{かた} に…。
				なれど、御 ^お 母 ^{はは} 上 ^{うえ} 、大 ^{おおい} 井 ^い の方 ^{かたき} 様 ^{さま} と三 ^{さん} 条 ^{じよう} の方 ^{かたき} 様 ^{さま} にお仕 ^{つか} えして、
				お二 ^{ふたり} 人 ^{にん} の慈 ^{いつく} しみに触 ^ふ れるうち ^に 、あれ程 ^{ほど} の悔 ^{くや} しさも憎 ^{にく} しみも
				消 ^き え果 ^{はて} たのでございます。
			三条夫人 ^わ 分 ^わ か ^か つておりましたよ、桔 ^き 梗 ^{きよう} 。竜 ^{りゆう} 芳 ^{ほう} 、後 ^{あと} を頼 ^{たの} みましたよ。	
				御 ^お 屋 ^{やかた} 形 ^{さま} には、本 ^{ほん} 願 ^{がん} 寺 ^じ 様 ^{さま} へ ^の 書 ^{しょ} 状 ^{じよう} いつも ^の 通 ^{とお} り認 ^{した} め ^{ました} と。
				それ ^{それ} から三 ^{さん} 条 ^{じよう} は命 ^{いのち} はて ^よ うと ^も 、いつ ^{いつ} い ^い か ^か なる時 ^{とき} も、
				お側 ^{そば} で殿 ^{との} をお見 ^み 守 ^{まも} りして ^お り ^ま す ^と 伝 ^{つた} え ^て お ^く れ […] 。
			竜芳 ^{ははうえ} 母 ^{ちち} 上 ^{ちち} 。父 ^{ちち} 上 ^{ちち} が来 ^き られ ^ま す。お気 ^き を確 ^{たし} かに…	
			三条夫人 ^め (目 ^と を閉 ^じ る)	
内部館↑			M	ギターブリッジ
屏風行灯←			武田信玄 ^{さんじよう} 三 ^{さん} 条 ^{じよう} 、三 ^{さん} 条 ^{じよう} 、儂 ^{わし} じゃ、信 ^{しん} 玄 ^{げん} じゃ。儂 ^{わし} を一人 ^{ひとり} にするな。(咳 ^{せき})	
	中上高 F・O	文字	信玄 ^{しんげん} の正 ^{せい} 室 ^{しつ} ・三 ^{さん} 条 ^{じよう} 夫 ^ふ 人 ^{じん} 歿 ^{ぼつ} 元 ^{げん} 龜 ^き 元 ^{げん} 年 ^{ねん} (1570年) 享 ^{きやう} 年 ^{ねん} 49歳 ^{さい}	
		広い空	第十四景	信玄死す
			しゅつえん 出 ^だ 演 ^{えん} 武 ^{たけ} 田 ^だ 勝 ^{かつ} 頼 ^り 、馬 ^ば 場 ^ば 信 ^{のぶ} 春 ^{はる} 、山 ^{はま} 原 ^{はら} 昌 ^{あき} 景 ^{かげ} 、原 ^{はら} 昌 ^{あき} 胤 ^ね 、内 ^{ない} 藤 ^{とう} 昌 ^{あき} 豊 ^{とよ} 、織 ^{おだ} 田 ^だ 信 ^{のぶ} 長 ^{なが} 、上 ^{うえ} 杉 ^{すぎ} 謙 ^{けん} 信 ^{しん} 、武 ^{たけ} 田 ^だ 信 ^{しん} 玄 ^{げん}	
		SE 声	三条声 ^{しんげんこ} それ ^{それ} から ^の 信 ^{しん} 玄 ^{げん} 公 ^{こう} のお心 ^{こころ} は、一 ^{いち} 路 ^ろ 京 ^{きやう} の都 ^{みやこ} へ向 ^む か ^っ て ^お り ^ま した。	
	法螺貝			(法 ^{ほら} 螺 ^{がい} 貝 ^な 鳴 ^{ひび} り響 ^び く)

	中平		信長	信長	なに しんげん せいじょう 何、信玄が西上しておるとな。何処までも油断ならぬ手強い
	中平 F・O				やつ かま いえやす えんぐん 奴。構わぬ、家康には援軍せず様子を見ることにしろ。
武田旗 ↓	下平→ 中平		侍女 尾花	しんげん こう とおとみ みかわ 信玄公は遠江・三河へと三万五千の大軍を進め、徳川家康	
			三方が 原	たたか みかた ほら たたか げんき ねん つき いえやす どの ふる あ と戦い、三方が原の戦い(元龜3年12月)で家康殿を震え上から	
				せて圧勝。徳川勢は二千人の兵を失ったのでござりまする。	
			侍女 寿々菜	おり おり のぶなが おうぼう こま は みやこ しょうぐん あしがが よしあき きま 折も折、信長の横暴さに困り果てた都の将軍、足利義昭様	
				から信玄殿の元へ、使いの者がやってきました。	
				のぶなが とうぼつ 信長討伐のため上洛せよと。しかし、すでにその頃、	
	中平 F・O			しんげん こう ふち やまい わずら 信玄公は不治の病を患っておりました。	
	上高		信玄	わし し 儂が死んだら、三年の間、隠し通せ。その間に国の繁栄を	
				築き、戦は決してするな。(咳)もし困ることあらば、越後の	
				上杉謙信を頼れ。あの男は立派な武将だ悪いようにせぬ。	
				皆の者、勝頼のこと頼んだぞ。儂の骨は円光院に眠っている	
	上高 F・O			さんじょう となり うず 三条の隣に埋めて…	
				M ギターブリッジ	
			文字	ただだ しんげん ぼつ てんしょうがねん ねん きょうねん さい 武田信玄 歿 天正元年(1573年) 享年53歳	
	上前平		動画 煙	しんげん こう なきから しもいな ごおり こまんぼ だび ふ 信玄公の亡骸は下伊那郡 駒場で茶毘に臥され、	
				その煙は天高く京の都のある西の方へと流れたそうな。	
				遺骨はその後、古府中へ運ばれ、火葬塚に葬られた後、	
	上前平 F・O			わ はか えん こういん さんねん あいだとど お 我が墓のある円光院に三年の間 留め置かれましたと。	
	下手 高 台		上杉 謙信	なに しんげんこう て さかずき と おと ひ 何、信玄公が…(手にした盃を取り落す)いつの日か	
			雲 竜虎	ふたり さいほう しょうど くも の かなた そら かわなかじま けつちやく 二人して西方浄土の雲に乗り、彼方の空で川中島の決着を	
	下高 F・O			っ 付けようではないか、のう、信玄殿。	
				てんしょうがねん ねん しんげん な ごねんご 天正元年(1573年)に信玄が亡くなって五年後の	
			文字	てんしょう ねん ねん うえずぎ けんしん のうしゅつ けつ 天正6年(1578年)、上杉謙信、脳出血にて死去	
				きょうねんよんじゅうきゅうさい 享年四十九歳	
陣幕↓			柵	第十五景 武田氏滅亡への道 長篠の合戦	
			大柵	ただだ かつより ばば のぶはる やまがたまさかけ はらまさたね ないとうまさとよ こうさかだんじょう ききょう 武田勝頼、馬場信春、山県昌景、原昌胤、内藤昌豊、高坂弾正、桔梗	

中平	武田勝頼	武田勝頼	美濃・明智城に続いて遠江・高天神城も我が二万の大軍を以て見事攻め落とす。この勢いで、長篠城設楽が原へと打って出ようぞ。
	馬場信春	馬場信春	勝頼様、戦はしばらくおやめ下さりませ。
	山県昌景	山県昌景	民百姓は疲れ切っております。
	馬場信春	馬場信春	このまま戦を続けるなどもつてのほか・・・
	武田勝頼	武田勝頼	勝頼は決めたのじゃ。御旗楯無ご照覧有れ。(去る)
	馬場信春	馬場信春	今日までの親しき交わりに、礼を申す。(別れの水杯)
	内藤昌豊	内藤昌豊	馬場信春殿、風林火山の旗のもとに、信濃の国深志城を守り幾多の合戦を戦い抜いて参ったものじゃが、どうやらこの長篠がわしの最期の決戦のようじゃ。
			勝頼殿をお守りして、織田信長、徳川家康に武田騎馬軍団の底力を見せてくれよう。
	馬場信春	馬場信春	内藤正豊殿、ともに信玄公への冥途の土産に命を懸けた戦働きをしようぞ。
中平 F・O		四天王 24将	エイエイオー、はっはっはっ・・・。(左右へ)
			M F・I して B・G
	文字		長篠の戦で 真田信綱 輝政 歿
	文字		天正3年(1575年) 馬場信春(武田四天王) 歿 享年60歳
			山県昌景(武田四天王) 歿 享年46歳
			内藤昌豊(武田四天王) 歿 享年54歳
			原昌胤(武田二十四将) 歿 享年44歳
	文字		天正6年(1578年) 高坂弾正(武田四天王) 松代海津城にて歿 享年52歳
	文字		天正10年(1582年) 仁科五郎信盛(武田勝頼の弟) 高遠城にて歿 享年26歳
上高		小雪	信玄・勝頼二代にわたって仕えてきた名うての武将たちが次々に討ち取られ、武田勢は総崩れとなった。

			早緑	なん 何でこうまで無残に負けてしまったのかねえ。
			撫子	のぶなが いえやす れんごうぐん ようい てっほう さんぜん ちよう まえ 信長・家康連合軍が用意した鉄砲三千丁の前にやあ
			つくし	さしもの武田騎馬軍団も手も足も出なかったってわけさ。
			桔梗	ああ、長篠の戦いを機に、甲斐・信濃両国の守護大名として あれほどの力を誇った武田は、滅びへの道を歩き始めた。
			小雪	おかしら、どうやら武田家最後の軍議が始まったようで。
	上高 F・O		つくし 撫子	見届けるのは辛い、これもあたいらのお役目だね。
新府城 ↓			エビ ローグ	冬の落日 勝頼の最期
			M	F・O
			出演	たけだかつより たけだのぶかつ きなだまさゆき おやまだのぶしげ じよるじの ほうしやうふじん こみやまとはる 武田勝頼、武田信勝、真田昌幸、小山田信茂、侍女藤野、北条夫人、小宮山友晴、
				おだのぶなが とくがねいやすりゆう ほう ききよう、こゆき しずき さいご ぐんぎ ほうし 織田信長、徳川家康、葛芳、桔梗、やよい、小雪、琴、卓緑、撫子、夏美、如月、つくし、全員
	中平	新府城	武田 勝頼	新府城に火を放つ。すれば、城は間もなく 焼け落ちよう。急ぎ、この韮崎から落ち延びるのじゃ。
			武田 信勝	父上、信勝は新府城に籠城して、最後迄戦いとうございます。
	SE 声	真田 昌幸	真田 昌幸	御屋形様、我が真田家の所領は目下平安でございます。 どうか、しばらくの間 御身を隠され、時期を待って 再び立ち上がって下さりませ。それまでは、この真田昌幸、 一命を賭してお世話申します。どうか上野の岩櫃城に。
			武田 勝頼	上野はなるほど時を稼ぐにはうってつけじゃ。 しばらくの間、匿って貰おうか。
			真田 昌幸	ははっ、有難き幸せに存じ…
		小山田 信茂	小山田 信茂	いや、待たれよ、真田殿。 御屋形様、いかに真田殿の仰せとあっても、 元を正せば、真田家は信濃衆ではござらぬか。 裏切り、主を変えるは、真田家のお家芸と聞いております。 信濃衆に心を許してはなりません。何卒、我が城に。 譜代家老として信縄公の時代より三代にわたり 武田家にお仕えてまいった小山田家。

				まして、我が祖母は、信虎殿の妹にござった。
				郡内 岩殿城こそって御屋形様をお守り致します。
				上野は遠すぎる故、かえって危険でござる。
			真田 昌幸	殿、何卒、何卒、上野の我が岩櫃城に。
			武田 勝頼	小山田信繁、帥の言うこと、もっともじゃ。
				では、皆の者、しばし国中を離れ、郡内の岩殿城に
陣幕 ↑				逃れるとしよう。
新府城 ↑	雪 E・F		映像	(北条夫人19歳、信勝16歳、勝頼37歳、
武田旗 ↑				侍女藤野らが付き従い、旅立つ)
			藤野	なれど奥方様、小山田信繁は勝頼殿を裏切って
				織田方に寝返り、義兄にあたる穴山梅雪殿までも。
				ばかりか勝頼殿の妹を妻に迎えている木曾義昌も
				同盟相手の北条氏政も武田を見限って。酷うござりまする。
		北条 夫人	北条 夫人	藤野、もう嘆きますまい。こうして、味方と思つた皆に背かれ
				行く当てない勝頼殿と我ら主従は、大菩薩峠近く
				その昔武田家の祖先が自害したという天目山目指して、
				笛吹川の支流・日川に沿って
				雪の山道をひたすら、歩き続けました。
			藤野	韮崎新府城をいでし折は、供の者五百人。
				なれど裏切りに次ぐ裏切り、離散に次ぐ離散で
				いつしか四十人程となり申した。
				一度負け戦を味わうと、弱り目に祟り目。
			武田 信勝	かてて加えて、この寒さとひもじさ。体も言うことをきかない。
	中高奥			遠く、織田方の雄叫びが聞こえる。
			北条 夫人	侍女たちは、互いに刺し違え、日川の流れに飛び込みました。
	中高奥 F・O		侍女全	(刺し違え、日川に身を投げる)
			武田 勝頼	信勝、帥はまだ若い。この武田家の家宝、御旗楯無を守って
				落ち伸びよ。

				わしの命運 <small>めいうん</small> はここまでじゃ。
			武田 信勝	ちちうえ 父上、そのようなことを…
			小宮山 友晴	お やかたさま こみやま 御屋形様、小宮山でございます。
			武田 勝頼	そち ちつきよ めい なに 帥は、蟄居を命じておったに、何ゆえここに。
		小宮山 友晴	小宮山 友晴	こみやま ともはる お やかたさま だいじ き この小宮山友晴、御屋形様の大事を聞き、
				いそ か しだい 急ぎ駆けつけました次第にござります。御屋形様、
				どうか、蟄居を解いて下さりませ。ご恩に報いせめて最後に
				この身を以て御屋形様の盾となつて、死にとうござりまする。
			北条 夫人	お やかたさま とも くだ 御屋形様、わらわもお供させて下さりませ。
				M F・I して B・G
			北条 夫人	ぶんぶ りやうどう か そな めいくん うた 文武両道を兼ね備え名君と謳われた
		北条 氏康		ほうじやう うじやす ちち も わ み ま いくさ いか もの 北条氏康を父に持った我が身、負け戦が如何なる物かは
				こころえ いのち お やかたさま とも 心得ております。わらわのこの命、御屋形様と共に、
				ここで涯ととうござりまする。
				くろかみ みだ よ は 黒髪の乱れたる世ぞ果てしなき
				思いに消ゆる露の玉の緒(辞世)
				との らいせ いっしょ 殿、来世もご一緒に。
			武田 勝頼	かつより れい もう ほうじやう ふじん こみやま おも 勝頼、礼を申すぞ。(北条夫人と小宮山とに) 思えば、
				ちちうえ な のち さんねん かん かく いくさ 父上は、亡くなられた後三年間はそれを隠し、戦はするなど
				ゆいごん たけだ しんげん い おとこ いたい 遺言された。しかし、武田信玄と言う男の偉大さは
				ぬぐ はら おもし わし かの の か 拭っても払っても重石となって僕の肩に押し掛かるばかり。
				たけだ そうだいしやう わし きお かしん 「武田の総大将は、この僕ぞー」と、気負うたびに家臣は
				はな さり… いま おも なん おろ 離れ去り…。今にして思えば何と愚かなことよ。
				ただけ すわけ さいこう ねが ゆめ き 武田家はおろか諏訪家再興の願いも夢と消えた。
			武田 信勝	ちちうえ わたし いっしょ 父上、私もご一緒させていただきます。
			武田 勝頼	のぶかつ ちち ゆる 信勝、父を許せよ。
			小宮山 友晴	よ く てき き こ あるじ さいご みとど たお (寄せ来る敵に切り込み主の最期を見届け、やがて倒れる)
中平 F・O			殺陣	さんにん たたか のち は (3人、戦いの後に果てる)

	雪 F・O		文字	てんしょう ねん(ねん) がつ にち たけだ かつより ほうじょう ふじん のぶかつ ぼつ 天正10年(1582年)3月11日 武田勝頼、北条夫人、信勝 歿
			M	F・O
			浪合	しもいな ごおり なみあい 下伊那郡 浪合
	上高	織田 信長	織田 信長	たけだ かつより そち くび のぶなが あず 武田勝頼、帥が首、しかとこの信長が預かり、 京の都にさらすことにしようぞ。 帥の父、武田信玄は京の都へ上る日を夢見ておった。 首だけとなったお主だが、せめて、 父信玄に代わって上洛の夢果たすが良からう。
	上高 F・O		文字	その3か月後 天正10年(1582年)6月2日 織田信長、本能寺の變にて歿 享年 四十八歳
家康馬 印→	下高	徳川 家康	徳川 家康	かつよりの いま てき みかた いくさ お 勝頼殿、今はもはや敵も味方もない。戦は終わったのじゃ。 天目山に寺を建て景德院にて、懇ろに弔って進ぜる。
		天目山 景德院		てんもく さん てら た けい といん ねんご とむら しん 天目山に寺を建て景德院にて、懇ろに弔って進ぜる。
家康馬 印←	下高 F・O			やす ねむ よ なむ しやか むにぶつ 安らかに眠るが良からう。南無釈迦牟尼仏。 武田氏滅亡の21年後、徳川家康、江戸幕府を開き、265年間続く。
			文字	たけだし めつぼう ねんご とくがわいえやす えど ぼくふ ひら ねんかんつづ 武田氏滅亡の21年後、徳川家康、江戸幕府を開き、265年間続く。
	中平	竜芳	竜芳	かつより し わ おとうと う と 勝頼が死んだと。ああ、我が弟が打ち取られたと・・・。 幼き日、諏訪姫に抱かれ、儂を兄上と無邪気に呼んで 懐いてくれた腹違いの愛しい弟。最早、そなたを守れぬこの 兄に、生きる甲斐は亡くなった。勝頼、死出の旅路は 些かも恐れずとも良い。この竜芳が案内する故。 (自害する)ともに参ろうな、父上母上の元に・・・。
			M	ギターブリッジ
			文字	しんげん さんなん のぶちか りゅうほう し きょうねん さい 信玄の三男、信親(竜芳) 死す。享年41歳 武田信玄の死から10年後、武田氏は滅亡。
	田園 E・F			たけだ しんげん し わんご たけだし めつぼう 武田信玄の死から10年後、武田氏は滅亡。
			エビ ローグ	白き雲流れ
	中平	夕焼け の荒野	小雪	こうして、信虎、信玄、勝頼、三代に亘り、戦国最強の軍団と して辺りを震え上がらせてきた甲斐の国・武田は滅びた。 あた るる あ かい くに たけだ ぼろ あたい等は、その一部始終を見てきたよ。
			やよい	あたい等は、その一部始終を見てきたよ。

			早緑 雫	生まれる者あれば死ぬる者あり、泣く者あれば笑う者あり、
			如月 撫子	裏切る者あれば味方もあり、勝つ者あれば負ける者あり。
			小雪 夏美	何が正義で、誰が悪か。今のあたい等にやあ分からない。
			つくし	みんなその時その時をただ懸命に生きたってえだけさ。
			桔梗	だけど、甲斐の野山と、川の流れ、空行く雲は、 五百年の時を超えて、
			全	人の世の生業を、今もただ、黙って見ているだけさ。
			M	イントロ入って
		動画		(山百合の花に舞うジャコウアゲハ…乱舞となり…)
			竜芳	(先立ちとなる)
	スモーク マシン		勝、信 夫人	(静かに立ち上がり、手を携え、霧の中に消える)
	上下高	夕焼け の草原	合唱	人は生まれ 愛し 戦い (美咲蘭・作詞 角田忠雄・作曲)
				やがて 彼方へ去りゆく
	雲 E・F			行き暮れて傷つき 荒野を彷徨いながら
				見上げれば 白き雲流れ
				我をいざなう
				ああ 愛しき人よ
				いつの日か あの空の涯にて
				夢を結ぶとき
				語り合おう 人の世の淋しさを
				そして 共に 微笑みかわそう
				見上げれば 白き雲流れ
				我をいざなう
	全面 F・O			ああ 愛しき人よ 共に
	雲 F・O			
綴帳↓				完
綴帳↑			全	カーテンコール

綴帳↓					

連絡先

メール misaki-ran@mth.biglobe.ne.jp

電話 0263-47-8005

FAX 同上

携帯 080-5140-8005

参考文献

- 甲陽軍鑑 吉田豊・訳 徳間書店
- 甲陽軍鑑 腰原哲朗・訳 教育社
- 風林火山 武田信玄の和歌物語 無生庵宗泉 里文出版
- 信玄軍記 松本清張 河出書房
- 名称武田信玄公 甲斐が生んだ乱世英雄の軌跡 白根桃源美術館
- 武田軍記 古戦場の旅 小林計一郎 人物往来社
- 人間武田信玄 赤城義雄 岩月書店
- よみがえる武田信玄の世界 山梨県立博物館
- 風林火山 戦国の世を駆け抜けた名称「武田信玄」と軍師「山本勘助」
平山 優 サンニチ印刷風林火山プロジェクト
- 武田信玄 人物叢書 奥野高広 吉川弘文館
- 日本の地名 筒井功 河出書房新社
- 武田信玄 機と智の人間学 土橋治重 三笠書房
- 武田信玄の明言明訓 笹本正治 中公新書
- 武田信玄の明言明訓 土橋治重 三笠書房
- 信玄和歌の世界 井上たか子 山梨日日新聞社
- 武田信玄三条夫人と皇室 畑川皓 畑川皓
- 武田の軍略 信玄とブレンたち 今川徳三 教育社
- 甲府盆地に残る虚構と真実 古屋兼雄 山梨ふるさと文庫
- 歴史の中で語られてこなかったこと 網野善彦 宮田登 洋泉社
- 武田信玄 町田源太郎 顕光閣
- 武田信玄合戦記 坂本徳一 新人物往来社
- 武田信玄 物語と史跡を訪ねて 土橋治重 成美堂出版
- 武田信玄のすべて 磯貝正義 新人物往来社
- 武田信玄に学ぶ 人は城人は石垣 上野晴朗 新人物往来社
- 歴史探訪 武田信玄 吉川弘文館
- 武田信玄の研究 その人望と強さの秘密 土橋治重 PHP研究所

信玄の妻 上野晴朗 新人物往来社
長野県の武田信玄伝説 笹本正治
武田信玄と松本平 笹本正治 一草舎
武田氏三代と信濃 笹本正治 郷土出版社
この一冊で日本の歴史がわかる！ 小和田哲男／著 三笠書房／刊
信濃の古典 長野県国語国文学会編 信濃毎日新聞社／刊
角川第二版 日本史辞典 高柳光寿、竹内理三／編 角川書店
国家の徳 曾野綾子 産経新聞社
最新年表信濃の歩み 児玉幸多 信濃毎日新聞社
歴史群像シリーズ 風林火山 信玄の戦いと武田二十四将
武田氏年表 武田史研究会編 高志書院
真田合戦記 幸綱風雲篇 幡大介 徳間文庫
戦国合戦史辞典 小和田泰経 新紀元社
改定新版 武田信玄 天才軍師山本勘助と千石最強軍団のすべて
常勝無敵「鉄の結束」を誇った武田信玄と武田二十四将
株式会社メディアックス
甲州の地口 志摩阿木夫 山日ライブラリー
歴史絵本 武田信玄 武田和子 株式会社善本社
武田信玄公 武田神社 (株)大和文庫1～7
戦国時代の大誤解 熊谷充晃 彩図社
雲の涯 甲斐武田二代合戦記 古田十駕 文芸春秋社
武田信玄と快川和尚 横山住雄 戎光祥出版
新編武田二十四将正伝 武田神社
角川学習シリーズ日本の歴史 山本博文 株式会社KADOKAWA
風林火山の旗風武田信玄 小暮正夫 講談社
百姓から見た戦国大名 黒田基樹 ちくま新書
戦国時代のすべてがわかる本 史上最強カラー図解 二木謙一 ナツメ社
武田信玄 武田三代興亡記 吉田龍司 新紀元社

上杉謙信 相川司 新紀元社
武田信玄はどこから来たか 岩崎正吾 山梨ふるさと文庫
甲斐むかし話の世界 佐藤真佐美 山梨ふるさと文庫
天と地と 海音寺潮五郎 角川書店
風林火山 井上靖 新潮文庫
城将 武田の忠臣・秋山信友の生涯 鬼丸智彦 山梨日日新聞社
貴方の知らない静岡県の歴史 山本博文 洋泉社
静岡 地理・地名・地図の謎 小和田哲男 実業の友社
踊り猫・異本甲斐のおとぎ話 濃野初美 音盤生活者
思わず人に話したくなる静岡学 県民岳研究会編 洋泉社
静岡 県民も知らない地名の謎 日本地名の会 PHP文庫
戦国武将の手紙を読む 小和田哲男 中公新書
戦国武将の黒川金山 大藪宏 山日ライブラリー
長篠の合戦 太向義明 山日ライブラリー
雑兵足軽たちの戦い 東郷隆 講談社文庫
古戦場と古城紀行 松縄善三郎 山梨ふるさと文庫
山梨の民謡 手塚洋一 山梨ふるさと文庫
山梨 地理・地名・地図の謎 平山優 実業之日本社
上杉謙信 吉川英治 六興出版
戦国武田の女達 中津攸子 山梨ふるさと文庫
山本勘助 山梨日日新聞社
図説 武田信玄の世界 歴史と旅 秋田書店
武田信玄と勝頼 文書に見る戦国大名の実像 鴨川達夫 岩波新書
甲斐の歴史を読み直す 開かれた山国 網野善彦 山日ライブラリー
武田氏と御岳の鐘 笹本正治 山日ライブラリー
酒折の宮とヤマトタケル 森和敏 (株)エンドレス
戦国武将物語 武田信玄と上杉謙信 小沢章友 講談社
戦国大名の合戦心得 上田信 講談社文庫

につぼん亭主50人史 永井路子 文春文庫
日本甲冑史 中西立太 大日本絵画
山梨県立博物館 常設展示案内
図解 戦国史 成美堂出版
水の国やまなし 信玄堤と甲斐の人々 山梨県立博物館
戦国人物伝 武田信玄と上杉謙信 すぎたとおる ポプラ社
山梨の歴史景観 山梨郷土研究会編 山梨日日新聞社
甲斐の黒駒 歴史を動かした馬たち 山梨県立博物館
新訂 新訓万葉集下巻 佐々木信綱編 岩波文庫
万葉の植物 松田修 株式会社保育者カラーブックス

作品に関する取材先

山梨県

新府城址(韮崎市)
武田八幡宮(韮崎市)
願成寺(韮崎市)
白山城(韮崎市)
武田神社(甲府市)
円光院(甲府市)
長禅寺(甲府市)
大泉寺(甲府市)
入明寺(甲府市)
信玄公火葬塚(甲府市)
河尻塚(甲府市)
要害山城(甲府市)
積翠寺(甲府市)
山梨県立文学館(甲府市)

山梨県立博物館(甲府市)
甲斐善光寺(甲府市)
東光寺(甲府市)
法泉寺(甲府市)
能成寺(甲府市)
甲府駅前信玄公銅像(甲府市)
湯村温泉(甲府市)
鳥居畑古戦場(甲州市)
景德院(甲州市)
恵林寺(甲州市)
信玄公隠し湯 増富の湯(北杜市)
三分一湧水(北杜市)
信玄公棒道(北杜市)
小荒間古戦場(北杜市)
小荒間口止め番所(北杜市)
富士 本栖湖・西湖(山梨県)

新潟県

林泉寺(上越市)
春日山城址(上越市)

長野県

上原城址(茅野市)
頼岳寺(茅野市)
塩尻峠合戦跡地(塩尻市・岡谷市)
柿弦峠(塩尻市)
塩嶺小野立ち公園(岡谷市)
小坂観音院(岡谷市)

小岩嶽城址(安曇野市)
平瀬城址(松本市)
塩尻市柿沢 首塚洞塚(塩尻市)
長岳寺(阿智村)
瀬澤古戦場(富士見町)
林城址(松本市)
猿が番場峠(麻績村)
海ノ口城址(南牧村)
海尻城址(南牧村)
青柳城址(筑北村)
川中島古戦場(長野市)
上田市八幡原古戦場(上田市)
板垣信方神社(上田市)
砥石城(上田市)
山本勘助墓(長野市)
根羽村(根羽村)
鳥居峠(長野市)
高遠城址(伊那市)
海津城跡(長野市)
林城址(松本市)
木曾
上田市真田町
諏訪湖(諏訪市)
諏訪大社(諏訪市、下諏訪町)
地藏峠(長野市松代～上田市真田)

群馬県

沼田城址

栃木県

犬伏(佐野市)

静岡県

久能山東照宮(静岡市)

三方が原古戦場(浜松市)

駿府城公園(静岡市)

富士宮市

愛知県

桶狭間古戦場(豊明市)

桶狭間古戦場公園(名古屋市)

設楽が原古戦場(新城市)

長篠城址(新城市)

京都府

妙心寺塔頭 玉鳳院 退蔵院 (京都市)

今宮神社(京都市)

取材協力(敬称略)

安藤嘉明 山梨県立博物館 (副館長、網野善彦氏ご遺族)

上越読み語りジャックの会(中村忠雄 山崎康子 荒井悦子)

スタッフ

脚本・演出	美咲 蘭
助演出	岩波美佐穂 東 洋子
演出部	菅沢真理 田中洋子 野崎桃加 野崎華加 島津則雄
舞台監督	レザンホール
舞台転換	レザンホール 清野貴史 高山ほのか
音楽監督・作編曲	角田忠雄
指揮	山田哲男
演奏	アンサンブル・セバスチャン
照明	株式会社長野舞台
音響	株式会社長野舞台
映像	オフィス蘭
映写	株式会社長野舞台
舞台装置設計	美咲 蘭 大垣孝夫
大道具	レザンホール オフィス蘭
小道具	栗田恒子 丸山ふき子
衣装縫製	栗田恒子 丸山ふき子 大濱マリ
衣装借用・着付け	株式会社井筒企画
和装着付け	美保姿着物総合学院 松橋輝子 宮坂幸江 他
結髪	東和美粧 古林美幸
床山	文柳かつら
メイクアップ	左右田奈々
練習用スティール写真	大垣孝夫
本番スティール写真	レザンホール
DVD・BD	アビレック
殺陣 特別演出	上野隆三

監修	小松芳郎
主催	信濃の国大合唱フェスティバルイン塩尻
	実行委員会

キャスト

プロローグ 京の都 羅城門跡の辺り

足利義政	赤羽義幸
日野富子	本澤正子
女童ゆき	増田江彩里
土一揆の百姓	築野文子
土一揆の百姓	林 慶子
土一揆の百姓	田中資子
土一揆の百姓	古畑ちとせ
土一揆の百姓	栗田恒子
土一揆の百姓	島 宜子
土一揆の百姓	加島美名子
都の人々	丸山ふき子
都の人々	今村久美子
都の人々	野崎華加
都の人々	成田俊郎
都の人々	大垣孝夫
都の人々	塩澤 明
都の人々	島津則雄
都の人々	飯島美代子
都の人々	大久保直子
都の人々	野崎桃加

都の人々	東 洋子
都の人々	河野恵梨奈
都の人々	菅沢真理
都の人々	杉浦紀行
都の人々	進藤万梨乃
都の人々	赤沼志保
都の人々	飯沢奈々
都の人々	床尾有里紗
都の人々	増田萌香菜
都の人々	市之瀬莉華
都の人々	秋山康則
下人	太田雅之
下人	奥深山新
下人	野々村仁

第一景 甲斐の国 躑躅が崎館

武田信虎	百瀬芳久
板垣信方	山口幹夫
大井夫人	田中洋子
侍女 楓	丸山ふき子
侍女 滯	今村久美子
家来1	江原政一
家来2	大矢敬典

第二景 甲斐の国 上野城界限

桔梗(野盗の頭領)	東 洋子
やよい	河野恵梨菜
夏美	田中資子

雫	加島美名子
早緑	林 慶子
小雪	野崎桃加
撫子	栗田恒子
如月	古畑ちとせ
つくし	島 宜子

第三景 父と子 そして元服

武田信虎	百瀬芳久
太郎勝千代	飯沢奈々
次郎信繁	山田幸音
板垣信方	山口幹夫
大井夫人	田中洋子
罪人	高木太門
やよい	河野恵梨菜
夏美	田中資子
雫	加島美名子
如月	古畑ちとせ
侍女・楓	丸山ふき子
侍女・滯	今村久美子

第四景 三条夫人輿入れ

武田信虎	百瀬芳久
大井夫人	田中洋子
武田晴信	成田俊郎
三条夫人	美咲 蘭
今川義元	島津則雄
武田信繁	山田幸音

禰々	増田萌香菜
武田信廉	増田江彩里
侍女 鄙乃	大久保直子
侍女 梶子	飯島美代子
侍女・楓	丸山ふき子
侍女・滯	今村久美子
歌唱ソリスト	大槻昌美
	岡田 愛
合唱	信濃の国合唱団
舞踊	塩尻市文化芸術振興協会

第五景 晴信初陣 海ノ口城攻め

板垣信方	山口幹夫
甘利虎安	大垣孝夫
武田信虎	百瀬芳久
武田晴信	成田俊郎
武田家の兵士	太田雅之
	奥深山新
	野々村仁
	東 洋子
	築野文子
	本澤正子
	高木太門
	秋山泰則
環	市之瀬莉華
佐容	野崎華加

小雪

野崎桃加

早緑

林 慶子

撫子

栗田恒子

つくし

島 宜子

第六景 父・信虎追放

正月に集う人々

赤沼志保

東 洋子

飯沢奈々

加島美名子

河野恵梨菜

菅沢真理

田中資子

築野文子

古畑ちとせ

本澤正子

村人たち

赤沼志保

東 洋子

栗田恒子

島 宜子

築野文子

野崎桃加

林 慶子

古畑ちとせ

武田晴信

成田俊郎

武田信虎

百瀬芳久

三条夫人

美咲 蘭

禰々	増田萌香菜
大井夫人	田中洋子
武田信繁	山田幸音
ヤマトタケル	田井克幸
板垣信方	山口幹夫
原虎胤	塩澤 明
馬場信春	島津則雄
武将たち	笹木俊志
	大矢敬典
	野々村仁
	太田雅之
	奥深山新
	白井滋郎
禰々	進藤万梨乃
侍女 鄙乃	大久保直子
侍女 梶子	飯島美代子
侍女・楓	丸山ふき子
侍女・滯	今村久美子
合唱	信濃の国合唱団
警護兵1	笹木俊志
警護兵2	白井滋郎

第七景 新しき国主と諏訪攻略

武田晴信	成田俊郎
甘利虎康	大垣孝夫

馬場信春	島津則雄
板垣信方	山口幹夫
武田信繁	赤羽義幸
原虎胤	塩澤 明
武田方の武将たち	大矢敬典
	野々村仁
	太田雅之
	奥深山新
	白井滋郎
	司 裕介
	江原政一
	笹木俊志
小幡虎盛	秋山泰則
諏訪人	本澤正子
	飯沢奈々
	赤沼志保
	東 洋子
	栗田恒子
	島 宜子
	築野文子
	野崎桃加
	林 慶子
	古畑ちとせ
	大久保直子
	飯島美代子
	丸山ふき子
	今村久美子

太鼓打ち	下畑敏弘
	小山摂子
舞踊	演技者
合唱	信濃の国合唱団
諏訪頼隆夫人 白妙	菅沢真理
諏訪姫	床尾有里紗
やよい	河野恵梨菜
雫	加島美名子
夏美	田中資子
木曾義昌	犬飼敏一
高遠頼継	寺島 清
小笠原長時	江原政一
村上義清	司 裕介
村人	本澤正子
	飯沢奈々
	赤沼志保
	東 洋子
	栗田恒子
	島 宜子
	築野文子
	野崎桃加
	林 慶子
	古畑ちとせ
	大久保直子
	飯島美代子
	丸山ふき子
	今村久美子

百足1	大矢敬典
諏訪頼重	矢部義章
禰々	進藤万梨乃
歌唱	岡田 愛
舞踊	塩尻市文化芸術振興協会

第八景 山本勘助仕官と諏訪姫

武田晴信	成田俊郎
板垣信方	山口幹夫
山本勘助	杉浦紀行
諏訪姫	床尾有里紗
タケミナカタノミコト	田井克幸
ヤサカトメノミコト	田中資子
歌唱	大槻昌美
小笠原長時	江原政一
村上義清	司 裕介

第九景 甲州法度

領民	本澤正子
	山田幸音
	赤沼志保
	河野恵梨菜
	加島美名子
	田中洋子
	今村久美子

	築野文子
武田晴信	成田俊郎
百姓初鹿野	今村久美子
百姓ふゆ	築野文子
百姓松三郎	美咲 蘭
百姓すぎな	大久保直子
武田義信	増田萌香菜
武田信親	増田江彩里
板垣信方	山口幹夫
甘利虎安	大垣孝夫
馬場信春	島津則雄
原虎胤	塩澤 明
山本勘助	杉浦紀行
真田幸隆	笹木俊志
春日源五郎	野々村仁
武田信繁	赤羽義幸
穴山信君	大矢敬典

第十景 塩尻峠(柿弦峠)の合戦

小雪	野崎桃加
撫子	栗田恒子
早緑	林 慶子
つくし	島 宜子
桔梗	東 洋子
如月	古畑ちとせ
小笠原長時	江原政一
村上義清	司 裕介
長尾景虎	白井滋郎

武田晴信	成田俊郎
三条夫人	美咲 蘭
武田義信	増田萌香菜
武田信親	増田江彩里
大井夫人	田中洋子
板垣信方	山口幹夫
甘利虎安	大垣孝夫
織田信長	太田雅之
小姓 森蘭丸	山田幸音
柿沢の村人	本澤正子
	山田幸音
	市之瀬莉華
	河野恵梨菜
	加島美名子
	赤沼志保
	今村久美子
	築野文子

第十一景 決戦川中島

武田晴信	成田俊郎
山本勘助	杉浦紀行
武田信繁	赤羽義幸
武田信廉	矢部義章
高坂弾正	野々村仁
馬場信春	島津則雄
法螺貝吹き	高木太門

三条夫人	美咲 蘭
上杉謙信	白井滋郎
殺陣	東映剣会
	山口幹夫
	大垣孝夫
	塩澤 明
	島津則雄
	赤羽義幸
	百瀬芳久
	飯澤奈々
	野崎桃加
	林 慶子
	島 宜子
	栗田恒子
	丸山ふき子
	今村久美子
	秋山泰則

第十二景 義信謀反

やよい	河野恵梨菜
	田中資子
	加島美名子
如月	古畑ちとせ
原虎胤	塩澤 明
馬場信春	島津則雄
武田信繁	赤羽義幸
武田信廉	矢部義章

武田義信	奥深山新
飯富虎昌	大垣孝夫
武田信玄	成田俊郎
山県昌景	大矢敬典
三条夫人	美咲 蘭
歌唱	岡田 愛
	大槻昌美
合唱	信濃の国合唱団

第十三景 椿散る 三条夫人旅立ち

侍女・梶子	飯島美代子
侍女・鄙乃	大久保直子
桔梗	東 洋子
三条夫人	美咲 蘭
竜芳	塩澤 明
武田信玄	成田俊郎

第十四景 信玄死す

武田勝頼	赤羽義幸
馬場信春	島津則雄
山県昌景	大垣孝夫
原昌胤	野々村仁
内藤昌豊	笹木俊志
織田信長	太田雅之
小姓 森蘭丸	山田幸音
侍女 寿々菜	本澤正子
侍女 尾花	野崎華加
武田信玄	成田俊郎

上杉謙信	白井滋郎
尼僧	岩波美佐穂
三条夫人	美咲 蘭

第十五景 滅亡への道 長篠の合戦

武田勝頼	赤羽義幸
馬場信春	島津則雄
山県昌景	大矢敬典
原昌胤	野々村仁
内藤昌豊	笹木俊志
高坂弾正	野々村仁
真田信綱	秋山泰則
武田方の武将	江原政一
穴山梅雪	山口幹夫
木曾義昌	大垣孝夫
北条氏政	犬飼敏一
小雪	野崎桃加
早緑	林 慶子
つくし	島 宜子

エピローグ 冬の落日 勝頼最期

武田勝頼	赤羽義幸
真田昌幸	江原政一
北条夫人	赤沼志保
武田信勝	飯澤奈々
小山田信茂	司 裕介
侍女 藤野	築野文子

侍女寿々菜	本澤正子
侍女尾花	野崎華加
勝頼・北条夫人の侍女	飯島美代子
	大久保直子
	丸山ふき子
	市之瀬莉華
	今村久美子
穴山梅雪	山口幹夫
木曾義昌	大垣孝夫
小宮山友晴	田井克幸
竜芳	塩澤 明
織田信長	太田雅之
徳川家康	百瀬芳久
小雪	野崎桃加
やよい	河野恵梨菜
雫	加島美名子
早緑	林 慶子
撫子	栗田恒子
夏美	田中資子
如月	古畑ちとせ
つくし	島 宜子
桔梗	東 洋子
スタッフ・キャスト全員	
合唱団	信濃の国合唱団
ソリスト	岡田 愛 大槻昌美
舞踊	塩尻市文化芸術振興協会